

壇浦兜軍記

○第一

宵^よも起^{おき}肝^{いたげ}て食^{しょく}し、夜^よ半^{はん}も念^{ねん}朝^{あした}も行^いふ故^{ゆゑ}も、虞^よ舜^{しゆん}の居^いの三^{さん}年^{ねん}もして都^とを去^さし、仲^{ちゆう}尼^にの政^{まつりごと}の暮^{くれ}月^{げつ}自^{みづか}理^らと、今^{いま}此^{こゝ}時^{とき}も武^ぶ將^{しやう}の中^{ちゆう}興^{こう}源^{げん}の朝^あ臣^{しん}頼^{らい}朝^あ卿^{けい}不^ふ順^{じゆん}を禁^い賞^{しやう}罰^{ばつ}を糺^{たじ}し絶^たへたるを繼^{つぎ}廢^{すた}れるを起^{おこ}し、民^{たみ}を安^{やすん}し衆^{しゆ}を和^わす七^{しち}德^{とく}八^{はち}教^{けう}を谷^{やう}七^{しち}郷^{かう}賑^{にぎ}わふ民^{たみ}の鎌^{かま}倉^{くら}は所^{しよ}大^{おほ}藏^{くら}の郷^{かう}も、營^{えい}居^{きよ}有^ある、さしも大^{おほ}小^{せう}手^て強^{かぢ}かりし木^き曾^その冠^{くわん}者^{じや}義^ぎ仲^{ちゆう}の江^{かう}州^{しゆう}粟^{あは}津^つの淡^{あは}と消^{きめ}平^{へい}家^けのあき名^なを文^{もん}字^じが關^{せき}も殘^{ざん}し、治^ち國^{こく}平^{へい}天^{てん}下^げの功^{こう}古^こ今^{いま}も秀^{ひいで}未^み家^けも先^{せん}蹤^{じゆう}なき大^{たい}將^{しやう}六^{りく}十^{じゆう}餘^よ州^{しゆう}の物^{もの}追^{つゐ}捕^と使^し、日^{にっ}本^{ぽん}弓^{かう}馬^ばの棟^{とう}梁^{りやう}と成^{なり}給^{たま}ふと、併^{しかし}佛^{ぶつ}神^{しん}のほうご也^{なり}と神^{しん}祇^ぎを禮^{らい}し百^{ひやく}靈^{れい}を懷^{あつ}給^{たま}ふ餘^{あま}り、秩^{ちやく}父^ふの庄^{しやう}司^し重^{しゆう}忠^{ちゆう}を以^{もつ}さいいつ比^ひより南^{なん}都^と東^{とう}大^{たい}寺^じ大^{たい}佛^{ぶつ}殿^{でん}を再^{さい}興^{かう}あり、既^{すで}も伽^が藍^{らん}成^{じやう}就^{じゆう}せりと、本^{ほん}多^たの次^じ郎^{らう}近^{ちん}經^{けい}を以^{もつ}訴^{うた}ふれば、根^{ねん}

井の太夫希義岩永左衛門尉致連、其外當日の諸役人膝を屈し相詰らる、又者なれども本多の近經召よよつて百分一も移せし伽藍の繪圖、御座近くまつらひ掛佛閣の高廣莊嚴の次第外も記しさゞぐれば、逐一も上覽有、重忠の佛智も叶ひしか、我思ふ如く造進せし條、嬉しや解脫の善根を植たりと、は嬉氣も見へ給へば近經はつと恐入、この冥加も餘るは詞主人重忠造營の功を得たると偏も君の洪福もよつてなり、太政入道清盛の伽藍を焼て衆類を族滅す、君の伽藍を再興有天地懸隔の違恐れながらは子孫の繁榮極有べからず、鎮護國家の基此上やいべきと祝し申せば一同も皆万歳と壽ける、大奥の間の廊下口鈴の綱音ないて、重忠の奥がた玉房は前座の間近く手をつかへ誰お取次と窺へば賴朝は覽し珍らしやちよぶの妻女くるしからず直もやせ何事ぞよと証有、いやお願ひ私からすみだい様のは使、たゞ今奥もて承れば、此度の太

佛くやうかねて君は上洛とのほど、みだい様もは參詣有べきは立願く
るしからずのほ一所もは上洛遊べし度思召侍へば窺ひ奉つれとのほ
と也と述べける頼朝打うなづかせ給ひ今四海一統すといへ共木曾が
餘類平家の殘黨義經錦木戸が討洩され隙を窺ふ此時節虚も鎌倉の明
がたし、我の皆成就の後上洛すべし、此度の政子計上洛しくやうをとげ
給へと申せ、さあらば玉房付添用意せよと返答有ければ玉房悦び是
はくお嬉しや、みだい様も嘸ほきげん、お悦申爲と勇ておくへ入よけ
る、頼朝重て、いか根井大夫岩永左衛門、兩人共政子が供し上洛し万
卒忽あき様も心を合はからふべしとの給へば、根井のはつと當惑顔岩
永左衛門進出頭をさげ、聊は誕を背よひのね共、かゝるめで度は上洛
も臆病のとバえりかゝつたる老人と相役仰付られ、心を合供奉仕らん
と身も取て不祥の至此儀は餘人も仰付られ下されかしと、根井の大夫

を去りめは懸憚なく言上ず、根井の大夫氣色をそんじ、口荒涼也、岩永
 殿、あつとやそふやいなど、やそふや未お請もせざる内、臆病のどばえり
 か、つたる老人と相役、不祥也との言上、推したり、我娘白梅をふさい
 ぬ所望有しか共、愛甲の前司太郎が子を養子、簪の契約せし故、承引せざ
 るを憤てのわんざん、比興至極とはつたど、よらめ、左様の私の宿意
 を以、は用を妨る岩永はあらず、何と成共い、いへ、臆病者の相役は
 は得ならぬ、それもすいしたり、彼、悴相州、箕尾谷村の谷蔭深く生
 立熊猪は猫の鼠どもてあつかい、かたのごとくかけ鳥など、すれ共、未
 兵法の奥義を知ず、弓矢鍛錬の後家を知べしと、武者修行、出過つる源
 平の戦義、經公の御手、屬し、實父愛甲の名字、勿論、我方へも、未來らね
 ば、根井共得名乗ず、そだち、箕尾谷村の在名を取て、箕尾谷四郎國時と
 名乗、平家の侍上總の七兵衛景清、又出會、少みぎわへ引退し、引矢不鍛

鎌の者共が臆病也と取さたを聞誤つての思ひ違おかしくとい
せも立ず其戦ひ壇浦船と陸との詞戦俗いふ川向の喧嘩よひとし
く箕尾谷四郎廣言放つてぬたりしが兵船一艘を寄上總の七兵衛景
清とおめいてかく始の詞は似ざりけりかいふつて逃て行景清長刀
追取のべて討ならばまつ二つは成べきを能くの臆病者刀物よとしな
ぶり物よせんとや思ひけん長刀小脇よかい込でみおのやが着たりけ
る兜の頓項を取はづしてんがうまじくらむんづと抓でうんど引身を
遁んと前へ引互よゑいやと引力よ鉢付の板より引ちぎつてこけつせ
ろびつ口へらず去よても汝恐ろしや腕の強と云ければ景清は又みお
のやが首の骨こそ強けれど敵もみかたも物笑なんと億病者で有まい
かとあざ笑へば膝立直し其時の軍奉行の土肥の眞平みおのやは大木

刀景清は長刀、手を碎て戦しが何とかしたりけんみわのや、太刀打折て力なく少水際へ引退臆したるよはあらざる故に帳面も其通記たりとの物語に帳面がせうこよ、但貴殿は左様の時太刀打折た軍は是迄、まず首されとて切するか、かゝるも引も軍の習必竟の勝をかちと云とよ景清世よながらへ君を狙奉る風聞有、吾倅又景清を付狙恥辱を雪ぐまじき物ならね共、それの後のさた必し今の詞忘るゝな岩永と包、無念の目よ洩て、こぼるゝ涙を袖よかくしは前よ向、先年系圖よ書のせ上覽よ入たる倅行がた知ず不奉公者の親として歴よ立まじり座並を穢も恥かしきよ、増てみだい所のは供恐すくなからず、は誕違背出るよいしはね共、此義の餘人よ、仰付られ某は本國よ浪人の願、所領を差上るとすは冥加あし、倅があんひを承はり届る迄、暫預奉り度存いと恐、入てぞのべよける願朝始終を聞召、子よよつて親よの名をも上るよ、老人の心遣不

便也、上洛の供を赦し望のとく所領を預り置上り、かへすとも又望よ
るべし、浪人の住所は心の儘勝手次第逼塞すべし、本多は跡備岩永の上
洛の先手は進直又都よどまり重忠よくりり、万事さたせしむ共指
圖は背き我意のまかた有べからず、就中上總の景清は平家無二の忠臣
國士無双と聞、あへなく討んも殘多しどもかふも重忠とはからひ、穩便
のさたあらまほしけれ、心へたるか岩永本多罷立と、籠中深く入御成給
ふ佛法王法此君より再び榮ゆる秋津國つぎぬ、めぐみぞ、月日立、春も漸
くおりの國夏よなるみやあつたの宮、聞へり人の國迄もかくれ名高
きは神よて、方の願取分て惡氣疫難さいなんを祈はさどくを宮づこの
散敷花をかきよせて、神のは庭の朝清散殘たる其木末より、土は春有ふ
せり也、春の旅、暖ならず寒からで思ひ有身も折とは心をひらく白梅り、
父よさそのれ古郷を出先りあふみの長濱へ、長道中を是ぞ此、おりの

あつたと聞からよ態も參らまほしかりし、いざと付よお供よて乗物つ
らせ參詣有、やい皆の者、此は社こそ楊貴妃の有家を尋唐土の方士が渡
りし常世の島蓬萊山とはこそぞかし、さずい貴き御神様皆信取てよふ
拜みや、それよ付此お社のねぎの娘は景清が妻なればこそよ隠れ忍び
ぬまい物でなし、我つまのみおのや殿行がた知ず、親子ふうふの名は有
ながら得あひぬも又とし様の、知行差上住なれし鎌倉を立のいて此こ
とく、旅他國なさるしも彼がわざ景清と見るならばかきむしつても恨
いふ心、其時は誰とも力を付て頼ぞやいのどの給へばめのどのさへ田
がほ尤く、此人數が一口宛くひ付ても、景清の一人や二人お氣遣遊ば
すなと力をそゆれば嬉しいく、大宮司ととへば隠ないどや住家
いづく、誰よ尋ふぞあれくあそこよ人こそあれ、太儀ながら、うば問
て見や何の太儀と立寄て、是物問ませよ、ねぎ殿なれば知てよ有ふ、大宮

司殿のいづくぞ教て下され、扱の旅のお人か、大宮司と申の我々が
頭殿、今での二人有は子息の夏茂様とて今の代取社の後、大門作りが
そでござる親の通夏様近年隠居なされ、海山を見はらして濱面又館
を立、衣笠様と云娘と一所ゝあれ、あそこへ白髪まじりのそ
うがみ、大小さいて、女中が一人付て見へるあれが通夏様衣笠様社、拜
なされて頓てこゝへとおしゆれば、お姫様聞てか聞た、願ふてもな
い首尾待請て詰ひらかふ、下とも乗物もとりゐの外又待ておよ、と
様お見へなされたらこゝと申せ、まだ見へるゝの間も有ふが其間、
自も、いざ神前へと引つれて、一禮、いせもふでらる、春色花漢たり鶯
の百囀、濱俗の地無何の郷心自得すれば、壽疆なしと口すんじ、娘を友な
ひ花よさそのれうかれくる前の大宮司、そうぢは誰じや福太夫か、此頃
あゝぬかゝるともおりにないか、いや別よかゝるともそれよ、たつた今

旅の女中がお二人様を尋て參られ、追付此所へお出なさるとやたれ
 ば、其間はお宮へ參つてこふと云ていたが、誰ぞやな見へたらばあふ
 迄よ休めく、身の折ふしの他國あるき近付も有尋來まい物ならず、娘
 を尋てくる女中の誰じやあ、いや私でござんすと立出る白梅、こな
 たなれば猶見知がないと親子、いぶかる計也そなたも存なされいで
 も、此方の景清殿と譯有中、お前のかたも忍び有と折々のみ玉章も、お二
 人のとよふ知てゐる、久し顔も見ぬ故も、はるく尋参りたり、早ふあ
 せて下さんせと心せかせてうら問、父の驚く衣笠のわるふ香込早合
 點、其景清殿連てござんせあひせふと、あいなけれと云かたり、衣笠様
 そりやひけうな、慥もこしよぬる人をつれてこいと、こりやりんきで
 ござんすの、よいがてんさつきよから此胸の内くらくとよゑかへ
 る本妻じや物りんきせいでの、とてもりんきと見らるしからのあひせ

ますとふつつりならぬせんないとも隙入すといなまやんせく、そ
んなれば景清殿の實正かぐもふて置まやんしたの、いらぬ念を入る
八夫が女房と一所よぬるが珍らまいか、いや珍らまうのない其一言を
聞ふ爲女子共合点か心得ましたと一やうよかくしさいたる一こと
いつバをならして聲よ、遁しのやらまど詰かくる、大宮司娘を押かて
ひ、誰なれば女のさいよ此躰のけうがつたり遁走する我よならず子
細をかたれ名をなのれ、こまやくなと云す共景清をこよへ出まや、其
上でいやらいでも名をなのる、それのむたい景清の三年此方ありか
を知らぬいや知ぬとい云せぬと争ふ半へ根井太夫走り付娘をせいし付
よを押まづめ、大宮司通夏と云は邊よな、我らの根井の太夫希義と云
者は我娘、此度鎌倉をお暇や、江州よ蟄居する其義の云よ及ず、過つる
源平八島の戦和主が簪かづさの景清、みおのや四郎と合戦のせうぶそ

れも聞及ばん、其みおのやとやの某が養子、是が夫、其場の耻辱のら耻しくや思ひけん、今以行がた知ず、夫を思ふ女、心景清まいこんを合、今日此所通行せしを幸、景清の和主が智なればかくし置んど我も知せず、此まぎも及ぶ、殊更、景清我君頼朝公を狙奉る御敵、かたゝ見のがしての通られず、かくして館をさがされば、大宮司のふちんたるべし、景清を出されよとのつ引させず詰かけたり、扱の聞及根井の太夫殿よな、さいぜん御息女、景清妾なりと偽も問落さん爲、どの知ず娘の理んきも取込、拙者の却ては息女も景清がありかを尋んと存る所、いやはやこちらあちらの仕合、長と返答すも旅行の妨手短すそふ、平家の一門滅亡の後、景清のかた切て参りもせず、便もせず、此方の娘もなつかしがり、若有所聞出さればお知せよ預りたしと返答す、一旦のちんぢの尤、能分別して見られよ一樹の蔭の雨やどり一河の流をくんでさへ人の情の

捨られず况多年の響鼻女房を預る程の景清、便もせず參らずといふ共
誰かさあらんと思ふべき、鎌倉殿はふしんのかしらん時も其いひ分
濟べきか、よい仕合で歴代の神職もつゑゆせられ、子供のるらうせうし
く、此理を辨すかくし通すか根井の太夫、悪いくせある、斯様のとせん
ぎゑかゝり、云すはよしとてかいやり又は捨置ず、館をさがそふか但
かくし置す存ぜぬと言せうて、當社明神ハ云ふ及ず天神地祇を驚し、せ
いごん立るか二つ一つ返答あれ大宮司と、ちつ共心赦さぬ面色大宮司
横手をはたと打、疑は尤誤入たり根井殿、聳の不便も娘のかはいさ
子供らがらうよかへ所領よかへ何しよ包申すべき、淺ましや神よ
つかへてもぼんぶ心けふのを知ざりし、平家の一門都落の時此娘景
清と一所又落行んと云しを、船又浮波よふしうきめよあはん不便さよ
預けんよ云を悦て預りし其時、ふうふのゑん切せて預るか取戻さば、今

の疑は受ま宏きよ、よい年をしてちゑなしと根井殿笑給はん、耻しや面目なやどはらくと、こぼるゝ涙をおさゆれば、なふ私も西國へお供せば一思ひ、なま中又預られ夫の生て有ながら、二年三年便りもなく捨られし我命、おしいではなけれ共もしやどひけうな心から、段々ほくらうさせます、赦して下されど、様どかつぼと伏て、泣ぬたる、娘泣な分別有、なふ根井殿、我先祖のおりの國の造明神をいたいき祭て千百年、かりも曲らず、偽らぬ、誠を以仕し身の大凡俗とひとしく、せいごん立ん口おしとの思へ共、耻も人目も子供らよはかへられず、只今せいごん立中、疑惑の念を殺給へ、清給へどつい立上れば、暫と根井の太夫走り寄ていだきとめ、よしなき所望誤たりもふせいごんよ及す、今の悔のほ一ごん我しんごんをつらぬいて、貴殿を疑ふの神を疑ふ勿体なし、とかく長居も神慮の恐れ早速ながらお暇中、疑晴てござらふか、参るく

大宮司殿再會必期あらんと娘娘も笑顔を作りずいぶんは無事では達
者でおさらば、さらばと立隔つ、もろこし人も仲磨の歌をしるべよふり
さけて、今や見るらん春日なる、笠の山といづる月空も、五つよなる鐘
の世上よひく東大寺、大佛供養もけふあすと諸國の人の參詣を、まつ
や町筋せばしとて山門のかたほとり、取ぶき屋根も置露も月の光もす
みる茶の、のれんのもんり釜敷も、へついの煙たへまなく、かふて行人、う
る人り、女主の顔像むつくりとしてうまそふな、むし立饅頭かひしやん
せ世間あるいり多けれど、歌よみ青丹よしとよみ奈良饅頭の、あんもよ
し、殊更神のほちかひぞひまん頭のむしくは、笠の山も咽がなり、五
重甌も立ゆげよかすがの里り賑はへり、こゝよ平家ふだいの忠臣かつ
さ七兵衛景清、さつま五郎信忠と云者有、一門は落命の折から取捨も成
べき身の、生りかたなく死りやすし、長生して主君のあだをほうせん物と

山林さんりんも身を委ゆだね時節ときせふを窺うかがひゐたりしがこんど大佛おほいそとくやらの爲ため頼朝よりとも上洛じやうらくどほのかゝ聞きて、心を合せかくれがをぬでの玉水たまみづ日ひにくれて、急しんど初夜しよやもなら坂さかや、まん頭まんづうる家の床や儿このはし暫しばほめんとたしすめば、是こゝにいづくよりほさんけいなされしぞ、夜よも入いてはくらうや、ゆるりどお休遊やすまばせと挨拶あいさつ片手かたてまたばこぼん、お二人ふたりながらさしのなりそなほ風俗ふうぞくおいやかゝ知しね共所ともところの名物ななぶつお慰なぐさもどさし出す饅頭まんぢうより先女房せんにようの、ゑがほぞ一ひとと口くちくひまほし、景清けいせいの只ただ一心いっしんも手てだてをくふうし返答へんたふせず、五郎ごろうみせかる追従ついでも貴たかい寺てらの門かどからとすが、そもじの風俗ふうぞくで頭饅まんぢうの味あじも思おもひやられた、見みれば門かど棟むねもも行灯あんどうもも書かて有あ家いへ名なの十一屋じゅういちやか、此こゝ心推量しんりやう致いたした饅頭まんぢうを十じゅうかへり一つそゆるといふ心こゝろで十一屋じゅういちやと付つたのそふか、ほんよ是こゝもよいほ推量すいりやう、成程なりほど左様ひだりさまとすたいがこつちの心こゝろのそふでない、朝あ七ななつから店みせ出いでてよるの四よつよみせ仕廻しまわ七ななつと四よつの時ときを合あ

せて十一屋とやます、是も尤頼朝上洛召れしと聞付ともさぞあらん、其外の參詣諸國の入り込左程せい出さいで、賣といくまい、なんと个程結構、諸堂廻廊以下再興し、肝心の此山門計残した、心有てか、但、始末か音も聞た程もない頼朝のまわいやつだと打笑へば、いや、此山門のそのかみ、聖武皇帝様と云王様のほこん立なされたを、平家のわる坊主清盛入道が、此大佛をやいた時残つた、此山門計能登守教經と云大悪人が、大佛様へいかけた矢が、それを此山門のたる木も當つた、矢のねやがらが今も有晝よふ見さしやんせ、いかよこわい者が、ないわること、がしたいとて、日本第一の佛様をやきくづすと云やうな悪人が、ま一人と有ふか、佛計かあの堂では五百人八百人、此堂で、千人二千人、人計も四千人程やき殺した、其報火付の大將頭中將重衡京鎌倉を引渡され、果の衆徒の手まかすつて七日さらされ、首切れた、其跡が山門の脇も

有是もあした見さしやんせ、左様も段々と悪行の積つもつた果は平家の今のさま、主ももけらいも頭を指出す者一人もない、此山門も手も懸ず其まゝ残り置るゝ、末代平家の悪逆を、人々知せてたしなません世の見しめじやどの物語、私がやうな何も知らぬ者でさへ、尤そふも存ますと、それと知ねば女の口齒も衣させぬ長咄よそも聞かす景清が本意なさは悲しき口惜さ胸もくだける計もて忍び、涙よくれければ、なま中のと問出して五郎も返答あぐみはて、有て過たるとも必付つそへつが有物、なんの平家計がそふわるふも有まいと云けせば、いへくこんなとでない、まだ大それた悪事が有咄まじよ、いやもふ承れるも及ぬと、聞ぬ先から耳驚かす四つの鐘、ひいき、渡ればあれ四つがなるみせしまひ時、各様も宿取てお休あされそこのいて下さんせと云を幸過分くと、立のけば、くどよ水打行灯、えめし道具一つも取直さず、かたへの上し

づさらくと引廻せば、五郎見かねて是女中、くらへ入た物も盗取世の中それは近頃不用心、まそつと念を入れて置れよと氣を付れば、いへく盗人のはいくわいしたの平家の代の時今の源氏の玄ひ深、せいひつな世もそんな氣遣ちつ共ないと、戸ざしぬ代との、今の時代でござんと、口も手本もしやんくと仕廻て別れ立かへれば、よしないとを又いふて、一度の恥も二度の口、ふさぎかねてぞみへよける、景清五郎をかたへよ招き聞れたるか五郎殿賤しき女の口すらかくの通りなれば、御一門の身の上を世上の嘲弄思ひやる、主君の仇を報せんと死べき命をなからゆれば死よ増る耻を聞、此山門も鍔幹を其儘置て、未代平家の譏を殘す、頼朝を討つは是を取捨て後のときは思ひずやとさしやけ、實もく口すから傳はるとい、中絶する折もあり、おかよ見するの情なし、といふて夜の手わざよ取捨も成まぬ人間を窺ひ晝のと云、せも立

すままだるし調、一心の眼力がんりきを以て捜さばしんのやみも晝同然びらうぜん、幸人もしづまつたり、御邊の足首をつかんで指上さしあり、門のかぶ木かぶきも手はどい
かん、それを傳ふて二かいへ上り垂木たるきを一いささがして見られよ、なふ其
段はたらきの御免めんあれ御存の我等眩暈げんうんやみ高い所へ上れば忽たちふこる土の上の
働はたらきの何也と指圖さしずみの背そむくまじ、聞てさへふらくと目がまうやうぢ
と頭かしらをかへ、胸押むねおし撫なれば、よし、人の頼たのまざとわらんづぬぎ捨身すてみを
固たかめ柱しらを傳つひ上らんと立寄所のりあしも上大内の松蔭まつかげを、人聲足音高提灯たかちやうちん見へ
来れば、折をりししなふ五郎殿ごろうだん、やり過すし後又こそと打うつれ木蔭かかげも忍しのびけ
る、山門の内より只一人長刀ちやうとうを杖つゑもつきのつさくど來きる大衆たいしゆ双方行
逢あひそれと見るより調、岩永左衛門殿いわながざゑもんだんひな、御けらいよも抑付おさせられず御大
身おほみのかろく敷し、御自身おのしんの御勤つとめ御おんくろふ也と挨拶あいさつす、大日坊たいにちぼうか、身の御
臺所たいしよの旅館りやくわんへ參上まゐりし只今退出たいしゆつす、夜中只一人いづかたへまいるる、元

來和僧わそうの平家のふだいかづさの忠清たかきよが弟、景清がふぢなれば我君のさ
す敵、とつく誅つぎせらるゝ筈の所身が取持、兄弟共不通致つうしし只今の平家の
ゆかりなし、疑はるゝ程の儀奉公ほうこうの上させんと、請合こひあてついでる首くび、何
か打捨うちすて平家の餘類よるいを尋、一手がらあふて、此左衛門迄こゝきよこん者ものも成
すいぶん心がけめさ、それ又付和僧わそうがはいの景清ながらへて此世このよも有
及ぬ仇あだを報はらせんなど、个様の時節ときせう心がけ、和僧を頼たのみくまい物でなし、
さあらこゝろバ快頼こゝろたのれ潜ひそか知されよ、討て成共なりともからめて成共岩永いそが、高名たかもせ
ねバ武士道立ぶしどうたてがたし其いしゆは、景清けいせいもいこんいなけれ共、みおのやの
四郎しろうと云者景清を付狙ねらふと聞、其みおのやも討せては根井ねいの太夫たふが娘
を我手わがても入ると叶はず、景清を我手で仕廻しまわみおのやも鼻明はなせ、根井が
娘を我手わがても入たさ、とを分わけて頼たのみ合点あてか、是こゝは何より安やすいい用もち、ちつ共お
心くるしめ給ふな、个様な用有ふとい存ぞんぜず、我等われらが高名たかも仕つからんと

くめん致し置たれ共、そこもとへ奉る、あんどなされとくぬい中の、一通
 取出し手又渡せば、挑灯もてど火かげよてらし、見ては悦び讀でぬらあ
 づき、いたゞいてくぬい中し、できたく、坊過分、いさいは其時さらば
 く、挑灯參れと夕露の草ふみちらし通ける、後又立て景清の始終とつ
 くと聞すまし立出貴僧は大日坊よて渡らせ給ふな、我こそ只今岩永よ
 頼まれ給ひし、かづさの七兵衛景清と聞て俄又げうてん顔、驚給ふな
 とくく承りる、岩永よ返答の間又合の偽か眞實の所存なれば手
 のみせぬ、出家とすおちかひのよしみを存、下手くろまう念を念を、入
 すと云せも立す扱く、面目かい、佛祖冥理今の返答が眞實でたまる物
 か、いやといへば即座又命をとらるゝ、それ悲しいではなけれ共ながら
 へて善果をつまん爲、間又合共く、一門の滅亡聞とひとしくあんせ
 じは和殿がとけんこの對面満足せり、こよひこゝへ來りし、深い願有

てのと、打明て語られよ何れの道も疎略なしと、無二の詞も心とけ手
をつかへ、貴僧の爲も平家は主君、たとへ出家の身成共、あへなく頼
朝又亡ほろびされ給ひしうつぶんの殘る筈、われ景清も力をそへ頼朝が仮
やへ忍び入、手引をなされ下されと思ひ、かんでぞ頼ける、安いとく、
手引せんと拔打ぬきはつしと打つをひらりとかひし、其手を取て引かつ
ぎ大地へとうと打付のつかしり、おぢながら實の入た悪人、か
けがへもなき弟の儕がのれをかんだ當なされ、追はらわれし我親の忠清殿は目
水晶すいしやう、親程こそあらず共、景清が底の根性見ぬくまいか、最前かくと知
たるゆへまづ二つよとい思ひしが、おぢの親の孝も有禮義も有、どかく
云内心をひるがへせば、互に主君の爲と、かんとんせしももふ是迄、く
ん念せよといしぎ付る、待景清、ちつとゆるめて云といのせい、儕お
ぢを殺したらば、從來がよふ有まいぞ、近いせうこの左馬の頭義朝が子

の源太義平、おち帯刀前生義賢を殺した故悪源太と異名を付られ、六條がいらで首きられしを知ぬか、儂も我を殺したら、悪七兵衛と笑はれんよふ分別せよとへらす口、悪七兵衛は愚のと、鬼七兵衛、蛇七兵衛共いはいへ、なん共ないと、腮又手を懸首捻きらんとする所を、さつま五郎飛で出き、腕取て引のくれバ、すきをあらせず大日坊ゆん手のかひなまつかど取、うんと聲かけ景清が兩手を二人が土ふねぢふせ、やい景清、いかよ二相を悟共さつま五郎が此躰のがてんが行まい、大日坊と某終又對面いせね共書狀を以示合、此度の大佛くやうを幸頼朝を討ふ、いさいかふくと某が進た、頼朝を討でない儂をまづかふせん云合、深い工思ひ知たか、なふ大日坊、我が出るを待兼たで有ふの、待兼た段ではない、景清が名を聞貴殿も出どの知たれ共、顔みぬ内いにくせのあんじ、書狀も岩永のほめよかけ見へ次第同道中管、幸のみやげ、なは打てつ

れ行ん尤ど、腕捻廻すまちつ共動かず、景清くつくと吹出しもふぬか
すとそれ迄か、まびと又成て物のいぬれぬ、いふておけく、ま死人とい
誰と、いふともしふ赤いと汗水又成て身をもがく、云となくば是見よと
左右をいと又腕がへし、ころくころび打ながら生どり又は叶ふまじ
首又してつれ行んと抜合はさみ立て切かくるゑたりやおふと渡り合
互又みがきしやひばの光、月ようそぶくかすが野の飛火をちらして、切
ひすふ大日坊がほうがまち、おどがひかけて切付る其たち風又さつま
五郎、一人立で叶はじと跡をも見ずして逃うせける、大どしぬけめ
討もらせし腹立と、大日坊又乗かすり吭のくさをぐつくと、つきな
らす鐘の聲、一、二、三、四、五、早七ツか、八ツ九ツも我みしへ入ざりし、頓て
みせ出す饅頭屋がよしずのかげ又忍びぬて、とくより窺ひ見るとも知
ず衣ひつばぎけさもぎ取、ずんぼろ坊主又はぎむくり一色残さずかき

いだき、まがいをけちらし忍び行おちの首切其かわり、名字の上總も云切て、悪七兵衛景清とい此時よりぞやける、女房よしずをおどり出扱こそく、景清と見た目いちがぬ君を狙ふ疑ない、かふ云内もみだい様の正前が氣遣、かりやへいかふか但夫よ知せふか、いや、景清が落先を見付て置が肝心かんもん饅頭屋がむし立見よとまたひ行、あんもよし又まあんよしけなげ、成けるかす、が山、鹿立みねの朝風よ、敵のえいぐいや、ちりぬらんかづさの七兵衛景清は、こんどの供養よ頼朝を討てもうむをさんぜんと、出立衆徒のよせ姿すはだよきたの藤なゆめ、まけがな物の大鎧、草すり長よざつくど着、上よ衣の玉だすき、けさをむすんで鉢まきし、敵をめいどへ送りやる、十王頭の脚當よ我身をしゆこの毘沙門小手、重代のあざ丸、あしお長よ結びさげ、跡よつゝきし女房の、心しめたる高からげゆだんせぬ氣の一腰の、この口早く抜かけて付従ふ共まらゑ

の長刀、小脇よかいこみ見渡せば、廻廊諸堂とくく、家々の幕兵具をかざりけいご、きびしく見へたりける。音せで通らばあしからんと所よ大音上、けいごおこたり給ふなど呼ひつてかけ通る、こゝぞ頼朝のかりと思しく、ひた白の大幕風よなびいてゆうくたり、仕おふせし嬉しやどのつさくど歩しが、いやく、内も用心さをあらん千里の馬も躓侮てふかくをどらば一期のかきんふてき達の無益ぞと汀のさきの小鯨を、ねらふ忍び足、待と一聲かけしれば、さしもの景清びつくりしふりかへる、なふ肝の太い景清我君を討ふとい、あたしか饅頭屋の女房と思やつたらあんの外のくい違誠の本多の近經が妻のからあや、ゆふべあふた覺てか、一寸もおくへりやらぬかへせく、マアこえやく也、女相手又する景清ならず、すつ込でゐよど、取合すいやく、そつちよせいでもこつちよ成と、ずいど抜て打懸るせんかた長刀取直し、石つきよて受あ

がしむすんづほどいつあしらへ共、女調もきどくの太刀さばきヤ隙ひま入め
んどう也と、石づき取のべぐつとあてみよ本多が妻、めくるめいてたち
たちく、打あゆめくすて歩行先の幕をひらりと押おし上て、打かけもるゝ追取あうどり刀、ち
ちぶのかく方玉房たまたまはぜんすつくと立、思ひ懸なく景清の又びつくりし
て、立どいまる、く調から綾あや、誰を見て景清呼より、其景清どれとこよ、それ
こそと教おしゆればいやく、是調の衆徒しゆと、あの出立が唐綾目からあやよかしくらぬか、
景清ならバ平家も取ても仁義じんぎをかねし勇者ゆう者と聞、我君われうを狙共尋常じんじやうよな
のりかけ神妙しんめうの働はたらこそ有べけれ、ひけうなさもしい姿をかへ、女計にょけいの此
かりやへおどなげなふなんどこられふ、必そこついやんな、是坊様、こん
どのくやらよ頼朝様の上洛じやうらくなされず、こゝのみだい所政子せうじ様のひかり
や、坊主のくる所でない歸らまやれく、但たの方角ほうかくよ迷まよふてか、大衆たいしゆの
馳走人ちそうにん、本多次郎近經道ほんたじやうきんけいみちえるべせよと有ければ、はつと答こたへするく、と立

出箇様の用も有べきかと、とくより木陰は待受たり、我等本多次郎近
經、頼朝公の詔を請、大佛くやうの内大衆方の馳走、又狼成玄かたあ
れ、禁も我等の役方角は迷ふての推参なら、道のあないせん、狼藉な
らばはからふ旨有、返答を承らんとそらえらすして、ちかすれば、
さいまゝく、えいなんの坊主像をかゆる、一旦の計略頼朝を討、二つ
のあい、かづさの七兵衛景清見て置と、頭をつゝみしけさかなぐつて捨
けれ、扱ひと二人の女も詰かけ詰かけ眼、氣を付ゆだんなし、近經え
ぱしとおくを諫女房をせいし、景清、我君を平家の仇主人の敵と、狙率
る、以外のひがと也、太政入道朝恩を忘れ、やしもすれば、天子をあやま
し民をくるしめし其積悪、後白河の法皇院宣を賜り、平家を亡ぼせよ
との勅詔なれば、平家の敵り身のおどり、我身を我身の敵と、知ざるか、
良禽の木を見てすみ忠臣の君をえらんで、仕ふ、心を改只今より、頼朝公

よ奉公せよと呼よせれば、頼朝よ奉公せよのたのめ、二言と吐かばひねり殺ころしてくれんすと、はがみをなし、口おしやこんどのくやう、頼朝上落あがりしたれ共、かく云景清を初平家の餘類よるいを恐れ、みだいと世上へ思はせん爲、態女原わだこを召めつれたりとさつま五郎が、注進ちゆうしんを、彼かれが我を誘こそ出す計略けいりやくとい心付ず、嬉しや本意を達せんと、忠を一圖かたちと像をやつし忍び入、よしなき骨ほねを折たよき、景清が、心さす敵の頼朝一人、憶病風引おぼびやうこんで鎌倉よ隠れかゝめバ力なし、女原本多ふせい五万十切て罪作つみり、本望のほの字もといかず、先此度のかへるく、時節を待て頼朝が頭かぶの景清が手裡しゅりよ在り、かねてなごりをかして置と傳つたへよとえんづ、くど立出る所へ手の者引ぐし、岩永左衛門どつと押よせ、ふがいな玄近經景清をなせかへす、手よ餘らば左衛門が受取た、さつま五郎のなきかあれ討とめと呼よせはれば、本多の左衛門よ打任せ皆々せいしてかりやよ

入、身がるよ出立さつま五郎飛んで出なんど景清五郎が計略段々どこ
たへるか我等岩永様の御影まで知行も在付く筈、うら山敷の降参せ
よ、傍輩のよしみ取次で得させんどのよまつたり、景清眼をくはつと見
開わひたかつたよよふうせた、儕計に殺生も佛も入ぬ手並に豫て知
つらんど大白、黒氣の其勢長刀柄長く追取のべみぢんよなさんと渡り
合百宏うの洞の内獅子のあれたるごとくよてばらり、くとあざたつ
る其勢ひよ岩永左衛門人一ばんよ逃失たり、主人が逃れば手の者共影
さへみせぬ其中よ、五郎一人が勝手い知らず度よ迷ひ、うろたへ廻るを
引とらへ、せすやうもなき人非人と大地よぶち付、しつかとふまへ一捻
ねちてぐつすりど、首引抜てつと立上り、見れ共かりやまづまつて手さ
す敵もなかりけり、よし〜こんどの遁す共我見込たる一念力、岩よも
入、雲よも乗、鎌倉山よこもらべこもれ、山をつんざき、岩をわり、終よの本

意を達せん物と長刀、小脇よかい込でまんづくと出て行、道せばからぬ天が下、敵を助くる仁者の道、古主を忘れぬ義者の道、あゆむも道の道ながら誠の道、世々よひく弓矢の道をしるべよてゆくゑ、定めずなりよける

○第二

清水や大慈大悲の深如海、ちかひを結ぶにえん日、其佛閣の下がはら、菊水の邊の辻講釋、かんそぐんだん三國志、講師關原甚内と紙よ記柱よかけ、紙子の長もいきつまりし、涙人らしく一こしぼつ込、聽衆を引き受け、んだいよかくり本引開素讀する、此時漢王自丞相府よ到て迎給ふ、大將軍を見れば、韓信也、樊噲いろを失ふて、御車の前よ拜伏して、やける、信の漂母よ食を乞市よ、勝をくかりし者也、今大將軍よ拜し給ひ、項羽聞て、大きよ笑ひ、天下の諸侯も漢中よ人なしと嘲らん、必止給へど、やけ

れハ蕭何走出樊噲無用の舌を動すとなかれ、我不才なれ共丞相の職も
ゐて大將軍をすしめ、と既も定つたり、樊噲を縛て獄も下し給はずんば、
諸大將皆不禮も傲とすけれハ、漢王武士も命じて樊噲を縛らせ給ふと、
扱昨日の講釋のかんそぐんだん、五卷目張良がわりふを以蕭何曹參兩
人が韓信を大將軍もなされと進すた所でござります、今日の其次漢王
壇を築て韓信を拜すと云下、扱只今素讀致いた樊噲が人がらハ、各がた
の思召は定て色まつかいも頬髭あれ、我儘きづいの大力日本ですさば、
坂田の公時か公平扱が様も有ふと思召ましよ、中々強計でござりま
せぬ、智惠第一と言張良陳平も劣らぬ大分別者と聞へました、時も分
別と言ハ、此本文のごとく樊噲が韓信を大將軍も拜なさるとは、無用
也とどめたる答、それ縛れといふやいやがらり後手三寸あり、牢屋へ
ついとひいて参つた、そこで供さきかもやつき出した、あそこでいぢよ

ひくさこしでいふつくさ、なんぞと聞け、樊噲殿さへあの通、况我等韓信
 を大將軍よなざるよとほ無用也と言たらさいごだまれ〜と幾千万
 の大將士卒皆韓信が手下よ付た、なんと我身一人縛られて大勢の口を
 止め韓信が下知を聞せた樊噲の、力計でない大分別者でいござりませ
 ぬか、尤と聽衆も聞取よねんなく、心うの、あるそらかきくれ俄よ一村ふ
 りくれれば、やれ大ふりと夕雨の足もとまらず聞人の、皆ちり〜と逃歸
 殘るの甚内只一人邪魔な雨やと夕立の跡は、れ渡る講釋小屋又人寄を
 待おたる、ふる雨は、とてもかくてもまの、ぎなん涙の雨は、れまなく凌
 かねよし衣笠は、父大宮司よいざなれ親子潛よ古郷を出心ざす方そ
 んぞよそこと音よ聞つ〜おどの山清水を尋來りしが、かたへを見れば
 講釋小屋よ人待ふせい、幸と立よつて是物どのふ五條坂はいづくぞや
 めこやと云遊君の所を知れ、教てたべ、是は、はかつれも女中方遊興なさ

るゝでも有まい、めんよふな人をお尋なさるゝな、さればあこやと云
女よあゝいで叶ぬ我ゝ故、尾張おひりからはるゝ尋ね参つたり、はてそれ
の遠方から御太儀千万、是此道を南へ行當り左へ上る道が有、それを一
丁半程いて花扇屋の戸平次と尋、あこやと問とへば隠かくれがない、是のゝかたじけな
去ながら、名も家名も覺よくい筆があらばかしてたべ、いや筆の有合せ
ず、其お持なされた扇子をはなへかふおあてなさるれば、花扇つい思ひ
出さるゝと座興ざきうも老おひの律義りちぎ又受、此扇をはなへ當れあてのはな扇あふできた
講釋かうしやくなさるゝ程有てとんちはつめい覺たゝ、は禮れいの重かさねてゝと娘を
いざない尋行、かゝる所へ取たゝと聲高く、權斷けんだん所のとりての役人ば
らくとかけ來り講釋かうしやく小屋を追とりまく思ひがけねと兼てのかくと、
甚内床せうとこ几ぎをひらりと飛後としろの高垣かきでだてよ取、小屋の柱のふしまちかき
ひね竹取ておしたわめ身がまへし、人たがひか名の誤あやまりか、講釋の致せ

共石いしとらるゝ覺めなし、上かみを恐れ奉たてまつれ、刀は物もの又手ての懸かね共、子細こさいを聞ぬ其
うちあいのもかゝらず、わけをいへ聞んと八方ひつぱつよりらんで扣ひかたり、こ
さかしき咎とが上意じやういを背そむか、走はさいの陣じん前で直じき又聞、物ないのせそ打うすへて
引ひくゝれと一ひとばん手、走はつてふり上あつゝかゝるさ、走はつたりと飛とちがへ、
ゆがめし竹たけのかた手てをはなせば、まつかうよりかたはなかけ、はつしと
はぢかれ眼まなこくらんでたぢく、徒よろ倚ひた迪たり引ひかへす、二ふたばん手てのさすま
たを取とれどつき出すねらいをはづし、沈しづんで裾すそをはねさすれば、向むかふ脚あし
をわいたしこ、まつさかさまよでんぐり返かへりすきもあらせず、三さんばん手、
つく棒ぼう取とのべまいてとらんとつき出す、心得こころえたりと身みをかねしつゝと
入いてすてつべい、みぢんよなれと走はつべいは、走はきつくぼりからりと投なげ
捨てべつたり、土つち又つくべふたり、一人ひとりがしりの叶かのじと大勢おほし四方しやうを取
廻まわし、乱みだかゝるを共ともせず、脚あしぼねかた骨ほね當あたる所ところを幸さいよ、力ちから有ありたけ人ひと有あり

けのふしをくだき手をくだき心をくだいて凌しのげるされ共防たもぐの只一人、終つひ又大勢おほいかり重かさりおさへてなれをぞかけよける、物頭半澤はんざわ六郎成清かけ付つれバ組ぐみの小頭せうとう罷出ばいしゅ、双方さうほうの働つと具ぐ又相あのべ目通めと近く引ひすゆる、六郎立寄たてよ面躰めんたいの形かたちかつかう、どつくど見届みとびつくりし、扱あこそくはやまつたるとえたりな、似に似にたれ共は尋たずの者もの又またあらす人たがひ、それなりとけと有あれば、どり手共てどもきよつと互たが又顔見合かみあ、ときかねて立かねれば、あ、付つも共ども又驚おどく計也けい也なり、關原せきがはら、甚内せきうちとやらんな懸かし間まもなくとけといふさぞふしん立べし、我主人われしゅじんの相役あいにやく岩永いわなが左衛門殿ざゑもん、夜前よるまへ對顔たいがんの節和殿せつわだが囁ささ下したがらいらよて辻講釋つじかうしやくする甚内せきうちと云者いひものこそ、平家へいけの侍悪さむらいあく七兵衛景清しちべゑけいせい又極またつたり、月つきばんなれば重忠じゆうしゆうの手てより召めどり給たまへと有あし故ゆゑ、某あつを召めれ召めどり來きれ去さながら、世よ又また似にたる人も有あそこのまかたすべからずと仰おほを受う、實じつ否ひを聞きつくらふ其内そのうち又組ぐみの者共ものども手柄てがらを争あらそひ此仕合このつかあ、彼等かれらが

そさうの六郎が誤手あやまりをすりや宥免ゆるめんせられよ、去いても一いこしをたいし
ながら上うへを恐れ又また向むかはざる神妙しんべうさ、働はたらのけあげさ奥床おくゆかし、甚内しんないと云いが實じつ
名なかなのられよ、ひろうして爲なわしくのはからいじと、立寄たちよてあんどき
ほどけば氣きもほどけ扱あいど、あんどしてけるが、飛とまさつて手てをつかへ、
是こゝに却かへつて恐れ入いたるは詭言わびごと、日本にっぽん一の剛ごうの者と聞き及およぶ景清けいせいも似にたる故ゆゑ、
疑うたがひ預ありし、身みも取とり恥辱ちじよくもあらず、重忠ちゆうちゆうの内うちも誰たれあらん半澤はんざく六
郎ろくわう成清せいせい殿どの、なにといて下くださる上何かを不足ふそくも、一言いっごのお恨うらみすべき殊更しゆぜい身の
上うへは尋たずね、やさねべけつく憚はげ有あり似にたり、關原せきげん甚内しんないとや、今日けふ渡世とせのかり
の名なもて、誠まことに井場いばの十藏じゆうざう一幸いっしやくとや浪人なみのり者もの一人ひとりの老母らうぼは、こくみの爲ため、面
をさらす辻講つち釋物しやくぶつたべなふとはざる計はかり、世よも住すまかひもあき身のうへ
は尋たずねよつて物語ものがたりは恥はしとさしうつむき、涙なみだぐみて見みへよける、六郎ろくわう下
部しもべも持もせたる鳥目とりめ十藏じゆうざうが前まへも置おせ、和殿わだん古ふるき文ふみも見みつらん、龍りゆうも地中ちちゆう

よ有時はみしづも類たぐひを同じうすれ共、上天の氣を得る時の勢ちからひ宇宙うちうよ
あふると見へたり、今漢人の世渡りは何をしても恥ぢならず、立身出世の
頃ちかのと随分老母も仕られよ、輕少けいせうながら此鳥目老母のかたへ進上す、必
必人違ちがひも渡世の邪魔じゃませし心付などと思はれそと、聞もあへずいや、
いや、只今一せんでも中受ての人違の堪忍かんじん代となり、謔言わはことの料れうあど、難
大の口も懸られては、貴公も我も一ぶん立す無用也と、戻もどさんどせしが
待まべし、老母も下さるゝ志こころざしつゝかへして、不禮の至中受て、快こころよから
ず、何とせんかどせんとあたりを見廻し、それよ、是奉るくはんせ
音、老母の二世をかこし給へどかたへも立たる清水のさんせん箱へ役
こんだり、なふ其義心ぎしんを見るも付彌そこつ面目かほなや、此旨主人むねもこん上
すべし又對面たいめんせんいざさらばと、一禮述いちれいて立歸たがひるけんぬよつものらす誤
を、誤入たる六郎がすなをもちしぶの家がらを却かへつて譽ほめざる人はあし、十

藏跡を見送りて、花も實も有武士や、万一外の役人ならば儂がそこつ
をつしまんど何の分も聞入す今じふんの後手うしろですすかぬまゝ、こんな
時の早く歸つて母者人のお顔を見るが身の祈禱と、一人つぶやき是の
扱、小屋をこはいよ打めいだどちりちろバひし木や竹をひろひ集る折
こそあれ、深編笠よかあみよ世を忍ぶ浪人めけ共ひれ有男、菊水の邊へんよ立やすら
ひなふ講釋殿まねと小手招き、誰ならんと立寄てさしのぞき、是は浪
浪人様此頃の見へもなされず、けふはくはん昔のほるん日定めては參
りなされふど、けさから心待致した今ほさんけいかお下向か、お聞なさ
れて下さりませ、私を悪七兵衛景清じやと申て、重忠のけらい半澤はんざわと申
者、たつた今參つて召とらるゝ所人違ひよ極り歸りしがほらんなされ
小屋も打くだかれ、おこし懸られと申所がないときのとくがればそれ
よそながら見申た、なふ其悪七兵衛景清との身共がとさ、是の思ひ懸

もない其景清様が何故又去秋お目よかしくしよりほふびんを加へられ今頃拂底な金銀を、毎度くなせ下されたと肝つぶせばいやまだ跡又段々有、一時又肝つぶすまい、今日半澤六郎が召とり又來りしも、自身か形恰好此景清又能似たる故、其似たる故某兼て思ふやう、天下の武將頼朝を狙我なれば却て我を詮議もきびしく用心も又さぞあらん、頼朝は心ゆるさせゆだんを窺ひ討んよ、此講釋師をこまづけのつ引させず腹切せ、景清運つたなく切腹せしむる者也と、書置をそへ置ば、すは景清こそ腹切たんなれど、京鎌倉心ゆるしゆだんは必定其虚を窺ひ討ん物と分別し、折るあたへし金銀の、和殿を殺さん命の價どの知ざるか、と聞てぎよつとし驚き顔の色ちがへば、いやぎよつとせらるくな、まだ驚くとが有花扇屋の、あこやが兄の井塲の十藏殿、といへば大ききあげうてんし、さて私の本名あこやと兄弟と云と、なんとしては存なされた

と興きさませせべ、面躰めんたい恰好かっかうの似たる貴殿きでんさへ、景清けいせいかど詮議せんぎ有我うがなればさ
 びしさすいりやうを推量すいりやうせられよ、都みやこ又足あしはどいめがたし一先立いちせんたてのかんと思ふよ
 付、五條坂ごじょうざかへ立たてへあこや又出逢であひ、右みぎの段だんをかたれば涙なみだをながし、其講こう
 釋師しやくし甚内しんないとす、井塲いぢやうの十藏じゆざうと云、我兄わがあに也との物語ものがたり我も聞きて興きさめしが
 かりそめながらなじみ深く、子迄こぢくわいたいせし其中そのちゆう又、今迄いまぢそれとは
 なせ知しせざりし、其心そのこころで我わがとも兄あによの咄はなすまじと尋たずねれば、大望おほのぞ有あり身み
 の上兄かみあによも心置こころをれ、露計つゆけいも知しせずと我わがをかばふあこやがてい心を聞きよ
 付、我禍わがわざを貴殿きでん又ぬらんと其時そのとき迄思おもひ詰つり物語ものがたりし、我惡念わがあくねん空そら恥はしく一生いっしやうあ
 じめぬ此このつらをもへ立たやうよ覺おぼしぞや、知しね内うちのそれもせひあし、知して
 の片時へんじも捨置すてれず、こよひ立退たてをあすへ延のびし我心底しんていを打明うちあり、ゑん者ちやうの因よ
 を結むすばんどわざく、是迄この参まゐりたり十藏じゆざう殿でんと、思おもひ詫わびたる面色めんしよくよ、餘あまりの
 とよあきれもせず、扱ありあこやを不よ便びんよ思おも召方めがたよりと、老母らうぼが万まへ度たく

のお心付も貴公きこうよな、アはつと計はかりまさしうつひき暫しばらく詞ことばもなかりしが、
くやしや此こゝとをゆふべよもけさよも存ぞんたら半はん澤ざいが來きりし時とき我われこそか
ずさの景清けいせい又また成なりすまして、仕し様やうもやうも有ありた物ものおそかりし殘念ざんねんやど、こ
ぶしをよざり身をふるひし目をすり、こする計はかり也なり、なふ其その心こゝろ底そこ聞きたる故ゆゑ
ありで行いんもほいなさよ是こゝ迄まで來きつたり、かまへてく我われと心こゝろのは
しよも懸からるゝな、こつがらと云い器量きりやうと云い、奉公ほうこうす共安きやすかるべき身みなれ
共とも、老母らうぼのまつこを見み届とどんど諸人しよじんよ面おもてをさらし辻つじ講釋かうしやく三錢さんぜん五ごせんの志
又また命いのちをつなぎ、恥はぢを忍しのぶ親孝行おんかうぎやうかんじても猶餘なほあり有ありわこやがゑんよつ
あなる我われなれば、貴殿きでんの老母らうぼの我母われぼ也なり七十しちじゅう餘ごり給たまふと聞き、此世こゝろの逗留どくりう
末すえ近ちかし起おこ伏心ふくしんを付つられよ着きふるしたれ共とも、此こゝ羽織はおり是こゝを貴殿きでんへ參まゐらす、
今迄いままで送りし合あ力は塵ちりづかよ捨する塵ちりほこり泥どろよ投なげる石瓦いしかわよふとつて、恩おん
よあらず情なさけよあらず、是こゝ計はかりこそ景清けいせいが誠まことの心こゝろを染そまはり、朝あさ夕ゆふかたよ打う

かけ一所より孝行頼入、心せかすの立寄て老母のおめよもかゝるべきが世をも人をも忍ぶ身の無禮ほめんとつたへてたべすいふんげんごよ又對面お暇すと立出る袖よすがつてなふ暫心のせんまんとめたけれ共、忍ぶもかつの智略の一つ、えてく落行先のいづく言殘されよ、さればくこよひの上のだいごよ一宿し、其行先は又そこよてのしあん次第と思はれよ、尤も何をいふもこゝは途中恐れ有、くのまきとは跡より追付き物語、我行迄は必し逗留あれ、是かふくどみしよ口外より誰も菊水の、おどを隔てさしやき合先それ迄はさらばく、ささらば互の目禮思ひずも移る姿の水鏡、それ十藏殿其顔が此つらと、なふ景清殿其面体が我つらと似たでないか、似た段か、思へば半澤六郎が見ちがへたるいふ、笑ふてわかれける勇者の離別又歎かずといかゝる、ことをや夕間ぐれ、ものゝあやめも、見ぬあたり、小家がちよとすさみぬる筆の

跡より引かへて町まちのもやうも風俗ふうぞくも、恙なげならず見へし五條坂ごじょうざかたそがれ、
時を懸かわびる懸行灯けんぎょうとうのほかげさへ、白く咲さたる軒のきのつま、花扇屋はなあふみと隠かくな
し、家名計けなひは人めきてあるをどへバ戸平次とへひらぢとて、こゝら名うての横着わらわちやく
者色ものいろと慾よくとを二道にみちよ、かせぎあるきて歸り足表あしをの口よりわめき聲こゑこり
やといつともみせよけつからぬ、たつた今日けふがくれたよどこへすつ込こふ
せつておるぞ、竹たけめ林りんめと呼立よびたる下女しもめも小めろも所ところすれ、うけつておだ
んな様、内はおきやくでてん、まひお料理りょうりよ吸物すくよと、上うへを下したへどか
へしておるよ、今頃いまごろ戻もつてうちどの者はなんになれ、お手がなる、お
林りんちやといてたもと、開ひらがればなんじや客きやくがどれた、町人まちびとか二本にほんかくら
ひたい物ものくらふてすいぢやないかよ、いへく、れつきとまた旅たびのお方かた、
お供ともの衆しゆよ問とたればおりの國くにの去いおかたこんど京みやこへ忍しのびのほゆき、
内うちかたのあこや様さまを聞及きかんでのお望のぞみ、隨分ずいぶんは馳走ちそうせと現銀げんぎんのしは

らひ、きのふのばんの丁子頭ちんしづがこんな小判こがねも成なりしたと、一包ひとつか指出しせば、こりやでかしをつた、天晴あつぱれ忠義ちゅうぎと金かねもあふていほや、顔障しんざい子のすきよりおくさしのぞき、そうしてあこやのざしきも見へぬが、こりやとこも何なにしてゐる、いゑく、あこや様さまの晝過ひるあきから、ざおんのさの屋やへ送おくつて、それから直すくまゝいつもの清水しみず参まゐり、ほんよきとくもおさんでと云いを打うけし何がきどく、嬉うれしがりもしられぬ、いん音ね様さまへ参まゐらふより此こおれもなびきおつたらなんぼ程り利生りきやうが有あふぞ、いよいとを思おもひ出した清水しみずへ逆さかよせして戻もどる所ところひつとらへ日頃ひごとの思おもひはらしてくりよと、いひ捨て出るでる門口かどぐちへ丁ちやうのあるあるるきがす、何なにとどがおこつたやらお代官しろがねのお使つかいが、名主なぬし様さまを會所くわいじよへ呼よ付よ目めのぬける程ほどしかつた上うへ、花扇屋はなあふみの戸平次とへへいじをつれてこいといらだての口上くちがし、ちやちやつとござりませ、ちきよとく、しいあつらわいの高たかがなんぞの云渡いわたし、ちよぼいちはるな畏かしこつた第一だいいちの宿やど

ならぬ心へたと判さへおせば濟とるす安やとのぬかさいで、どうもんぐいな猿松め、サウせおろと先も立ふくれづらして出て行、白波の、よする瀧もあらぬ共、こゝも流のかり枕跡なき夢の、ついさめて、送り迎の、袖の露だてよふつく、あこやとの浮世もすねし戀のやみ、てらすまのしが挑灯もそれと、印の花扇、あるじがもとよ立かへる、おくのざしきも、待も久敷宵の月、あやしの籠かけ造障子半葺おし明て、隔ぬ中の親子づれ、前の大宮司通夏、娘相手のきばらし酒、人の氣を汲こめるが酌、お待なされたあこや様、今お歸りと知せるよぞ、國元迄も隠なき花の都のお女郎、さあ、是へと老人のふつゝかぢらぬ挨拶も、様子有げの一座と、見て取あこやが胸の中、うねべにだての勤ぶり、ほんも浮世の味な物、こんな詫た所さへ、色里の數も入遠い國迄、隠なく、あこやを見よふのよ、ふのと心づくし、預る、苦界する身の身も取て、忝い共本望共萬の

とひさし置おき、どんでも戻る筈なれど、心も任せぬうきふしとて立破たふられぬ先のさしき、斷ことわりたらば漸やうく今遅おそいゆるしなさんせと、たばこ吸付すさせば女中にきさせるいたゞきて花も實も有あり仰先盃共あずさんが、とゞ様とても自も尋聞たい分有わて、心がせけばと指よりて平家の侍七兵衛景清殿、過こつる壽永の秋の頃は一門の供にし、西國へ下り賜たまひしが御身の上も恙つかもなく都へ歸りましますと慥たしかな便聞たよりきながら終つひも一度のよすがもなし、そもじのとひ兼かてより聞て知たる深い中、七兵衛殿のお身の上、ござり所せも御存ごぞんならめ姫をせいの相互あひま語つて聞せて賜たまひれと打付う問懸とられ、扱いいと彌心やこころよおさめ其そのお尋もといなんのと、七兵衛さんやら八兵衛さんやら一座流のお客の名、當座あたに覺おぼてゐるせふが跡あとが跡迄あとそれがまあ、寺方てらかなんどのやうも過去帳くわこぢやうも付ついて置おきまいし、わざや知ぬわいな、とよ深いの浅あいのと、みぢんこつちも覺おぼえないよ、そんなときとや、や

るせがないとはやり詞でまぎらかす、父の老人をバよりひつ取いや是
のハ尤世間存ぜぬおなか女、我胸計がてんしてやぶから棒の尋やう、な
んの有やうを答召れふ、かくチ拙者のおはりの國、あつた明神又任ず前
の大宮司通夏是成娘の衣笠として彼七兵衛がつれそふ女、露程も隔心な
い中、前大宮司通夏とい兼てさたまもは聞有べし、チそんなむつかしい
歌がるたも有やうあ、永い名は今が聞初、衣笠様でも塗笠様でも、知ぬと
いふよとがあいとけんもほろも云はなせば、そんならどふでも我夫
の景清様の知ぬぞや迄、さもしいぞや、きたないぞや、さすがに娼婦一
夜妻小心も引くらべて本妻の衣笠が、りんきまつどの氣もあろかど疑
ふての、とぞやの慮外ながらあつたの大宮司長袖と計思ふてか、二こし
さいて武士の行儀、其娘の衣笠がなんのひけうな妬が有ふ、夫の噂のや
りよもない見ると聞とのか女郎と、心のさげしみ穂も出れば猶も勤め

かたぎを見せ、妬ねたみが有ふが鼠ねづみが有ふが、知ぬから構かまひいせねど素人しらごとおなごのくせとして、流ながを立たる身みとさへいへばさもしいとのみ心の嘲あざわらひ口くちへり出いねど貌かたちへ出いてはしたない本妻ほんつまよバわり、本妻ほんつまぞや妾てかけぞやとて夫おつとを思おもふよ二ツりない、其その思おもやる夫おつとの行衛ゆゑいやでもおふでも知しさよや置おぬ、こりや新あたしいおかしわいの、めんめの夫おつとのゆくゑを此こあこやよ無理無理よまればか、ままだまら〜まわの貌かたちわい、つべこべどあゝの口くちわいと互あひよつのである女のいち、たゞこのあいそも引ひかへてふたりがもやす朱煙しゆゑん管くだのきせる、かつちかち〜灰吹はいふきの口くちもさくける計はかり也、折ひしも井場いぢやうの十藏じうざうの講釋かうしやくの場ばの人ひとたがへ、不慮りよのなんぎを遁のがれじ上景清じやうけいせいが情なさけの程ほど殊ことあこやよ語かたらんと心こころざしたる宵よひの間の、人目ひとめよかざす扇屋あふぢやうの内うちよ通とほれバ下くだ女小女こんなろ、是こゝに久ひさしふり珍めづらしいは出いど、いふよあこやが氣きの配ばいえりめづかひの簾すだれごし見みなれしはわりの紋所もんじよ、兄十藏あにじうざうとハ露つゆ知しず顔かほの背そむけ。

灯火とうしほの景清と見るよりもわるい所へうとまじと思ふ心も思はず知ず、
まあくこよひのいでと、かぶりふる、いや此兩人罷歸らぬ、夜が
明ふが日が出よふが尋るを聞ぬ間いつかなとよじらぬ、さゝいと
こなど床とこの間の木枕取てねころぶぞ、いつ迄也ときこん次第かたて勝手
次第、勝手よくさしきへいさし合ふやと、心を碎くだ云廻し十藏なんの氣
も付ねば、次のさしきも人待顔にまだいなすぞや、まんき、氣よくわぬ
さしきべらくとい勤ぬと、すつと立て間の障子しやうじばつたりさすが、衣きぬ
笠がさいおぼこ育そだちの氣もよわく何と詞をかけ造下つくろのさしきと隔へだてして心を、
明さぬうたてさよ、あこやの次へ立やいな、時も時折も折ひよんな所へ
景清殿と、すがりよつて、兄様十藏様と、さつても似たり横貌よこがたなら形かたちふり
から、爪つめを二ツ其上うへに此はおり、どふして召てどふしん、貌胸かたなでさする
計也あはれ、さればく似たも付て、けふは既すでもあぶないとし、みよ口よせこ

まゝと暫語る其内も垣間見えたる前大宮司娘引連やあゝ智殿見付申た、お隠有など聲かくれば衣笠も後より、是なる聞へぬ景清様いが程忍び給ふ共、手づから仕立し此はかり見ちがへてよい物かど、身を引まのし貌を見て、こなたのけふの講釋殿か、恥しとさしうつむきまばし詞もなかりしが、此はかり召からの景清殿のおゆくゑ、こなたが知ては極りし、わしは聞せて給ひれと頼も又涙なり、十藏も重ねく取違られ氣もどまぐれ、挨拶まどろよあさるれば、いやゝ兄様合點がいくまい、あなたはな、尾張のあつたの大宮司様お娘の衣笠様、誠有おかたどり常々噂も知たれ共、今の身がらの景清様お爲いかゞと心を隔時の拍子の云かゝり深ふおかくし申せしが、衣笠様聞てたゞ、景清様のはと今兄様の叱咄、鎌倉よりのせんごつよく都の住居も折あしければ、暫他國も身をおくすと、暇乞さへ言傳わざ、日陰のお身のおいとしさ

と語るも聞も涙なり、父の老人十歳又打向ひ、景清かげきよはや京地みやこを立退たひなゆ
くゑもさだか又知ぬとなべん、と尋たづあるくも正眞しょうしんのやみ又礫つば幸ちよか
な其元の形恰なり好景清かかげきよ又似たる上定紋じやうぢもんのすわりたる其羽織うよくを着ちやくされし
に、我神道われしんたうの一躰たい分身ぶんしん取も直さぬ七兵衛景清、此前大宮司あひが逢あたい用事
外ならず、娘衣笠又暇ひまをくれ、ふうふのゑんを切てたべ、頼たのずとさし付つ又
思おもひこんだる一通聞て驚く衣笠姫いかさひめとく様それは何おつなえやる、お心の
乱るゝ程は酒さけの上うへらずともやそも俄にわか又狂氣きやうきもなされまいが、ふうふの
ゑんを切そふとの國元くにもとでおつなえやつた、お詞ことばとは天地あまのつちの違ちがひわえやつん
どがてんがいかぬ、まがてんのいかにね管都くだ又上のほり夫おつとを尋ね連歸れんきらんと
いふたいな、此父このちちが虚うそぞやわやい、世よ又なき平家へいけの討うちもらされ、ゑんを
つなぐは身の滅亡めつぼう切腹せつぷくか遠島えんたうは鏡かがみよかけていやしのく、義理ぎりも情なさけも
せなか又腹はらと云いふ悲かなしとやる方かたあく、日頃ひごとの義理ぎりも惠めぐみも有あり父上ちちのうへと思おもひ

くらせしよ、いつの間も其やふなひきやうなふ氣も成給ふ淺ましさま
どかきくどく、ヤぐどく、と叶ぬとは是でも非でも景清も、ゑん切そふ
と極めた胸變せぬが神道の第一、景清の一躰分身、娘笠衣も暇をくれ
めさ。一家の因が切たいと詞するどよこねかくる、十藏もぎよつとせし
が、みつくい心底恥かして腹おんど、神道の一躰分身面白し、我世渡
りの軍書の講釋、樊噲をかたれば、樊噲が魂張良をとけば張良が意其理
を以七兵衛景清が、性根も成て返答すると老人が、願さき、顔つき付ては
つたとよらみ、神の非禮を受ずと云ふ穢不淨の魂もて、つらのかはのあ
つたのかすねぎ、そつちから望まいでも、こつちよそのぬ女房去た〜
と詞もひかぬよ衣笠姫、すいさんな十藏、澤山そふよ人の女房、さつた
〜とまこなし貌しやほよかかしい、よるも〜氣違の有條此衣笠の
相手よならぬぞ、相手よならふが成まいが、鼻が心見さげし上の、男のか

うけ離別わかちく、マ此父が吞込からはいかもさつぱりゑんは切た、いゑへなんぼおしやつても、景清殿のこんりんざい我妻、かふ言たらてつきりと勘當、親子のゑんをきらうで有ふが、親子のゑんを切ふより此首切て下さんせ、夫故又まぬる命ちり共灰共思はぬ、是程又思ふのみ、景清様の返答へんとうの、どふで有ふ講釋殿かうしやくどのと理ことわり又責せめられて十藏も、感ずる心又面おもてを和やわらめ、でかしたり女房共、其心底しんていを聞て、いどふも去れぬ、やつぱり元のめうとく、いやこな男のぐれりく、と心のそろぬ、景清、一たん舅しゅうがもらふた暇、いやぞう言ても約束やくそく變がへ、そふでござんす、いつ迄も縁ゆかりの切ぬ、いや此親がせひさらすいやさらさぬと三方ろんぎ更さらはてしもなき所へ會所くわいじよを戻もどる主の戸平次、いつ又かわりてぐんぐん又やり首くび十方じふぱうよくれし其ふぜい、えあん中戸なかどよさしかしれ、かくみの三人せり合聲あうせい大宮司の景清の、囁ささやちらりと聞みし立たはな息いきもせす伺うかがひある、内に

かく共まらかの父いつ迄かくと争ても、せんなきと詞をやわらげ、十藏殿あこや殿、我一通を聞てたべ衣笠もよつく聞惣じてせかいの女の子は生れし親の家を離、夫は任す身の上なれば子とても親の儘ならず、去よよつて親のどがを娘よかくる法もなく、娘のどがの勿論、親の身よかしらぬと、天下一統の式目、景清を智又持たるとて鎌倉殿の御咎有べき筈のなけれ共こよ一つの誤の景清西國よ赴時節、戰場迄女をぐせんもいか也、預け置んと頼し故、今のなんざの氣も付ず、うかくと預り置疑かする聳のゑん、一生の不調法くやしいとをしたなあど、わたる茶碗をついで見るよひとしきぐちよ立歸り、そゞろよ子供のかあいさふびんさ、鎌倉殿の崇よあはしいか成うさめよあはんも知ず、忍ろしやと思ふより所詮、我身の義心を捨、衣笠よゑんを切さば三方四方の爲よしと、思ひ誥たる老のゑあん臆病者の義理知ずと、笑ひば笑へ十

其の爲、弓矢取身もあらず、長袖ながそでの身玄や者と、得手勝手も分別極め、生れ付のかたいぢごかしは是程迄のやり付しは、娘が誠の心底よかんじ入たる今日の景清殿、尤との思ひながら父が心も思ひ分て衣笠を去てくだされひ、恨はなを捨てお頼みすと神は仕ゆる身ながらも、子故の道いふみ迷まよひ胸のいんどを引立て、どこやみの夜と知れける、衣笠の猶悲かなしくお年の扱もよせまい者、それ程迄はお心の愚おろかさも成者か、親を人よ笑わせて子の身として嬉しからふか、思ひやつても下さんせ、それ程のと辨わかぬ某たれではなけれどな、儕等が爲世話いるよ親よもちがふどうばかり者と、氣をもみいらつ老泣おきなまたぐり上たる持病ぢびやうの痰火たんわせき上くせき入いり、それくそれがお世話かしくとまじのかたいぢやと背撫せなおろしませあわれへともとの一間へいたれば、十藏兄弟明た口ふさぎかねてぞあきれぬる、今迄まほれし戸平次が様子ようすを聞て氣いそく是こゝは

その兄公あにきよい所へよふさせた、二人ながら近ふよりや一大事の談合だんがふが有、先高がかふ玄やの代官だいくわん所の侍が會所くわいじよへおれを呼付よび抱かかのあこやを此方へ渡せ、景清かげせいがありかを責せめさいあんでいのすと云た、談合だんがふとのこゝのと、あこやよふ聞てたも兄公あにきの前まへで云いくけれど、どふからそなたはほれてゐるの、其人そのひとをいとしなげと責せめふと云所へおつと云てどふやられふ、其上そのうへまたつた一人の奉公人ほうこうにん花代はなしろなしまやしきへやつてり、口くちを天井てんじやうへ釣つりて置屋しやうばいの商賣しょうばいがならねば、呼屋よびの衆しゆも迷惑めいわくそこで味あじをやつたの、いゑく此方このあたのあこやよそんな客きやくのござりませぬ、其上そのうへとふから私わたくしが女房にやうぼう引上ひきあ、今いまで勤つとめのさせませぬとぬつべりどやつたが、代官だいくわんも賢かしこいとかくあこやをつれ参れ直じき尋たずると手詰てづめのせんど、こゝが談合だんがふの要所かぎどころよふさきや、是こゝを幸さいおつと云て女房にやうぼう成なてたもれば、景清かげせいがせんぞとそもじよいかくらぬの、兄公あにきそふぢやないか、それでも代官だいくわんが呑込のりこぬか、そこよ

ムツの上分別こゝが又談合の要所、われ今かくへいた大々しが、娘あを
やがかはりよこいつをとらへてはせんさくなされませと、訴人またら
ほうびのすくなく、錢十貫、それを元手、よめうとづれで、きんごまて遊
んだら面白かるで、有まいか、十藏殿は小姑妹、簀の戸平次が講釋さし
ても置まいぞや、此談合いやかおふか、おふなら極樂いや、あらぢごく
どふぞや、と氣をいらつ、二人のめませ、ようなづき合、是んだん、
尤の区分別、なんの是が談合所あつと、すせ妹、花扇屋のお内儀様と、氏
なふて玉の輿、ときほふて見すれば、兄公よ、い合点、いや見かけ、又似合
ぬ、婿明玄や、いの、あこやどふしやる、さればいなわし、玄やとて木で
も石でも作らぬ身、まんどらよくふも思ひねど、兄様や母様の、心を今迄
きがねの遠慮、おつと讀た皆迄云まい、そんならめうとよ成氣、玄やの、は
て、扱兄の十藏が水入すのなかふと、ほんよそふ玄や、いりふて三人打て

置、玄やんく、シ、おくのお容を逃さぬやうよ、馳走や玄や女房共、たつた今會所へいてほらびの十くいんかたげて戻ると、獨が胸さん用はき違たる足もとの草履下駄やら雪駄やら心も付ず走行、十藏跡を見送つて、是く妹、一寸のふれバ尋延ると偽の偽つたが、宿の仕廻りえあんが有か、兄様より似合ぬあんど、此間よ衣笠様いづくへなり共おとしまじ、代官所へいさざぎやふ此あこやがとらられて、賣殺されるが賣てもの景清様へ心ざし、わしもお前の妹じや物、でかしたり神妙也其心底を聞ばあんど、某の今宵の内景清よ追付きくだんを語、一時も早く都を退さん、落付所いゑるべ有てど、かたればちやくと兩のみよ手をおしわて、是く景清様の落付所わしよ聞せて下さんすな、聞まいと云其心い、いか成火水の責よあふ共性根乱ぬ其内い、かくしぬかうと思へ共、心の底よ覺あらば身のくるしさよ氣もより、口走るまい物でもおし、

わまやそれが悲しさよ乞求ても聞たい知たい夫のゆくへうの空せ
かいの女房の風上よも置れぬわしゐんぐゐん人お中よやどした此や
やも能うのこう人あれと思ふて下さんせと忍び涙ぞはてしなき十
藏も心根を不便と云ほるゝ氣を取直し、最前の詞も似ぬみれんの歎
よ隙とりて、衣笠様よあやまちあらば心の操皆むだとぬかるな妹十藏
のはやいくぞと、跡も心残り共先も恩有義理の道立別てぞ出て行、あ
こやの思ひの胸押さげ、我ながらぐち涙、なんとして泣たぞと心よ心
恥まめて、おくの一間を窺は、はや表よ挑灯の光もけんぬのはい
はい戸平次の先よ立鬼の首を取たるこしち、女房共くあこやのどこ
よぞ、代官様がお出せや奥のお客のなんとしたと、とへど返事もうろつ
く内庭よ入込代官がさも押柄よいかつ聲あつたの神職前大宮司通夏
のいづくよ有、かく云の岩永左右衛門が家の子荒木源五と云者、は邊の

娘衣笠悪七兵衛景清よ、えんを組くべか尋者の一るい、尋問たづね子細有急ぎ此方へ渡さるべし、ぬはいあらばりふじんよふんごみなわ打てつれかへる、返答へんとういかんと呼よわつたり、前大宮司通夏少も驚く氣色けしきなく、刀やいばひつ提娘をかこひえづくと立出た出岩永左右衛門殿の下知として、我娘衣笠を召よつれて歸らんとし、景清がありか尋ん爲か、それならば無用よあされ、西國落よ別てより景清が行衛すんど存せぬ隙ひまつぬえをいひんより立歸つて此通、岩永殿よ聞されいはれは太儀たぎで有たなど、嘲詞あざわらひよあら木もひとつとし、知ぬとて知せずよ置ふか、それ戸平次引立いと云よあこやがいやくく、ああなたがは存ないと云せうこよいわしが立、かんまへてれうじせまいぞ、親方の戸平次殿と云よびつくりけうと貌、こぞやどふぞや女房共親方どのなんのとうろたへたか女房共く、いやらしい女房とは誰と、五條坂のあこやの景清が妾おとこものと、せけんよ隠かくない中を人

聞のわるい女房呼り置てもらそ、其筈ぞやあるまいがな花扇屋の
お内儀は打て置えやんくを忘れたかなことの兄いどこへいた兄公
兄公どうろたへ眼源五よべつたり行當るをはつたとねめ付あこやを
女房とは大きな偽僂迎も遁さぬやつ、此上の二人の女つれ歸つてがう
もんする、大宮司娘を渡され、忝くも鎌倉殿の代官、岩永左衛門が下
知を受向ふたる某、身不肖の侍と侮てあこくひ違後悔ばしせらるゝな
とけんぬよ任すりくつ詰返答もせず黙然とえべしえあんにくれぬた
る、人よ計物いせうん共すん共答ぬは、鋭意を嘲どが人其方とても
遁しいせじと、詞あらゝよ責かゝる老人はつと息をつぎ膝を打て、そ
ふぞや、ぐちよ歸つた老ぼれ今めがさめたと持たる刀、娘の前よ投出し
儂も前大宮司通夏が娘ぞよ、父が今迄立ぬいた片いちむだとよせぬや
うよ、がてんしたかうろたへなと、いせんのみれんよ引かへて詞も涼し

き目の色も衣笠刀押裁親のゆづりのかたいち受つぐの娘の役其かた
いちを見て置と、すらりとぬいて戸平次がかた先ずつばと切さぐれば、
うんとおつけ伏ながらたゆまぬ剛氣もむしやぶり付源五もさすが
武士の投刀も手をかけさくゑんふせい父はずかさす押隔りさわが
れな侍其元の相手もは此しの腕とつば本くつろげぬかばきらんず
いきほひも氣を吞れてぞひかへる戸平次は深手ながらしがみ付ん
と身をもがくおこしも立ずのつかしりぐつとさいたるとめめの刀女
わざよはかひくし大宮司聲を懸父が譲のかたいちは是迄の見届たり
して其跡はなんとく、此跡はかやうも持たる刀のきつ先を咽も
がりとつき立るさなくて叶ぬ筈死そこなふなりつばよせよと
またしきもせず守りぬる衣笠顔をふり上て有がたや父上のみれん
のお心ひるがへり勇のお顔見て死れば親子のゑんも切ぬと云大宮司

が娘こそ景清が妻也と末世末代いゝるゝの我身の上の諸願成就神の
教の高天が原、佛の道の極樂淨土よ今ぞ赴嬉しさとくるしみつゝむ笑
貌あこやのせんかたうろく涙、手負の次第又息よのり今こそしやバ
のたそがれ時、終よのしほむ夕がほや、五條あたりの白露と消行身こそ
はかなけれ、父の歎の色めもなく、口論よよつて戸平次を討て捨たる娘
の衣笠、玄がいえたればさん用すんだり此上よも云ぶんあらばとよが
り切たる面色よ、ハテ相手とし死る上、此方よ構ぬとと、歎きよ沈むあこ
やをとらへ物をもいせす引立行、大宮司のほいなげよ見送つて死が
いよより、娘でかしてくれた去りどてのよふしんだ、さうぬく、戸平
次め、よふ訴人しおつたな、よいきみなめよあひおつた、去どてのよふの
切たぞ殺したぞ、此親が老よほれ子よ迷ひ埒もない分別ちがひ恥の有
たけ吐出したよ、おとが死でくれたので魂がさつぱり、景清殿のおきゝ

やつたら嘸嬉さぞうれしかるほうびである、今のりつばなさいこの躰ていを見せぬが
残り多いわい、けなげな娘を持たと思へば心がいそ／＼するわやいと
死骸をしべしおし動うごかしほんよそなたはしんだもの、生てゐる者のや
うよくよくとよまいごと、まだぐちみれんが直ならぬとしかつてくれ
お笑てくれな、もふとふもこたへられぬ、一生のみれん納心なごころのたけをな
かせてくれと、たゞへ／＼し涙の溜たまり、わつとさけびてどうと坐しせんと、
ふかくよ見へけるが、ハッ副そふじや誠まことよそうじや、娘がさいこの一ごんよ
我身の納を知らせしな、浮世うきよのちりよ交まじりて神かみよ仕ゆるよひもなし、
神道より佛道ぶつだうよ赴おもむく手本てほんの聖徳太子しやうとくたいし、今より法のりの修行しゆぎやうよ出四天王寺しよじやうてんわうじよ
參詣さんぎし諸人しよじんよ勸化くわんげをすゝむるこそ娘がぼだい我身の爲ありがた有難ありがたし／＼と
差さぞへぬいて警打しやうだ切末せつまつ打立うちたちて立出たちだる、か程涼すずかしき佛の道何なにとてあつた
の神垣かみかきと、隔へだてのあらじ此世このよの迷まよひ波羅伊玉はらいたま意喜いき余目あまめ出玉だまも利益りやくの、同じ

むむおみだぶの六字ハ、六根清淨とさとり行身を頼もしき

○第三

梟の脛短しといへ共是をつがバ憂なん、鵠の脛長しといへ共是をた
バ悲なん民をせいすると此理もひとし、されバ治る九重も猶も非常を
いましめの、水上清き堀河は所當時鎌倉の嚴命もしたがり、秩父庄司次
郎重忠さんりまゆこの代官として、兼ては民の公事さいばん私のはか
らひなく、道よくもらぬ十寸鏡智仁の勇士とかやけり、同席も相並ぶ
岩永左衛門致連、南都東大寺の建立よりすぐさま都へ押留り、重忠の助
役どがうし悪七兵衛景清が、ありかをさがす邪智倭奸表の忠義も見せ
かけて、おのがいこんをさしはさむ心の慮の二股竹、どらの威をかる狐
どの、きよろつく面もあらわれたり、當日の取次役兩人のほ前も出清水
の轟は坊は出也と披露もつれ大廣間より入給へば、はやく是へと請

ぜらる、法印重忠ほういんも向ひ給ひ、平家へいけの侍七兵衛景清さむらいしちべゐかげい、禰坂ねさか坊ぼくも入來らば、擲取ちやくき
 て出せよと先達さきだつての御使者ししや、尤平家盛さかんの時節ときふしに彼景清かのかげい、くんの音を信しんじ
 七十五里しちごじゅうごりの境さかひを隔へだてし、おはりの國くにより日參ひさんせえ、世よの人の知所ちしよ、然しかるも
 壽永じゆえいの戰たたかひも西國さいこくへ赴おもむき、それよりいんしんの音信おんしん不通つうつう、よしんば忍しのびて觀音くわんおんへ參
 詣まがを致いたすもせよ、出家しゆつげ法師はふしの手ても及およぶ彼かれもあらず、からめどらるし
 子細しさいあらば、それこそぶかの役やく、出家しゆつげもふ不相應ふさうおう、此義こゝぎを辭退じたい申まをさん爲
 の參上さんじやうと、憚おそる色いろなくの給たまふも、重忠じゆうちゆうふしんの氣色けしき、バみ岩永いわえい左衛門ざゑもん詞
 をすし、み、いや是こゝに秩父ちちぶ殿どのの存ぞんなきと、某たれが存付ぞんぷ、もとより、坊ぼくに景清かげい
 がだんなな寺てら、心をゆるし參詣さんげいせまい物ものでなし、所ところをだます、又また手てあしとや
 らからめどつて出でされなば、ほうびのいつか、どお寺てらの爲ためと存ぞんるからど、
 いのせも果はてず、このけしからぬ致連おれつらの、仰おん我眞言ごしんごんの密法みつほう、五輪ごりん種子しゆし周
 遍へん法界ほうかい、鬼畜きちく人天にんてん、皆みな是大日だいにちと説とか、れて、廣大くわうだい無邊むへんの大慈だいじ、景清かげい來きつて我

を頼まば一命もかけてかくまひの事ども、からめ取て出すなどは耳
よふるしも穢らひし、よしそれが曲ごととして没収せられば傘一本、沙門
の身よいとはぬとと詞を放てやさるれば、岩永も云がしり、ねちくさ
い老僧、大日やら大ねつやらそれは存ぜず、景清がした持達後日、
さたよ及ばん、既よ以近い手本は五條坂の遊君、あこやと云女を六ばら
よ引出し、景清がありかを尋る毎日の拷問、きのふに拙者が承はりけふ
は是成重忠の當番、家來共よ云付憂めを見すると云と京中よ隠れなく、
則其松をあこやの松と、異名迄付る程の大せんぎ知られぬと云と有る
まい、とよよらば法師の身とて拷問せまい物でなし、轟坊を引かへ驚坊
よしてくれん、まよまないお坊よかゝつては用共を怠るとさしたると
もなけれ共仕廻付ね座を立て次の一間よ入よける、重忠法印を近く
招き、景清がせんぎのと、重忠が胸中口外よ出さぬとあがら、貴僧は格別

あかしやさん、平家の方又も誰彼と名有弓取り多き中、彼景清の一人當千あつたらまきものゝふ假からめとればとて無下又一命を断べきや、何とぞ彼が心を和らめ源氏の幕下は付置ば、勇者の胤を日本は永く残さん國の實、臥龍先生が孟獲を七度迄助けかへし、終りの蜀のみかたどちしつる例をまねぶ寸志の忠義景清まれば入來らば、此道理を演説有て源氏に仕へ存命せよと、謙の教にお僧の役必頼み存ると、敬ひ深くの給ふよぞ、轟は坊はつとかんじ、今も初めぬ秩父殿の仁愛、一見阿字の佛教も外ならず覺さふらふと、歡喜の領掌あし給ひ、ばやほ暇ともぎとふよ、出家かたぎの濁なき清水、さして歸らるゝ、ちよぶの郎等、榛澤六郎成清遊君あこやを拷問の時刻も限る未の刻、六波羅より立歸りは門よわろす囚人かご、簾を上げて引出す、姿いだての襟や、いましめのなは引かへて縫のもやうのいと結、小づま取手も儘なれど胸のほどけぬ思ひの

色形かたちのはでゝ氣きのまほれ筒つづ又生いひたる牡丹ぼたん花はなの、水みづ上加かぬるふぜい也、榛はん澤ざい六郎むさしは前まへ又出い仰あや又任まかせなのをゆるし、様々さまざまなだめ不便ふびんを加くわへ尋問たづねいへ共とも、なんぶん景清かげきよがゆくゑ存ぞんぜぬと計けい、外ほか又す口くちも是こゝさき故ゆゑ召めしつれていど、披露ひろう半なかバ又岩永いわなが左右衛門さうゑもんつかくど立出たちだ不念ふねん也、榛澤はんざい科人かじん又ないも懸かず、其上かみ見みれバ拷問がうもん又つかれたる氣色けしきも見みへぬが、聞きへた、扱あひは邊へんがけふの拷問がうもんなまぬるくやられしな、よいく明日あしたの拙者せつしやが受取うけと、そふく家來けらい任まかせも成なまじ、自身じしんの手並てなみ見みせつけ、景清かげきよがありかほさかしてみせふ、侍共さむらいどもやいあの女めめ岩永いわなががやしきへ引ひど、れいのそこつを重忠じゆうちゆう押おしめいや先待さきまちれよ岩永いわながなをゆるし拷問がうもんをゆるめしも、榛澤はんざいが私わたくしならず某それがしが了簡れうげん其上かみ又今日けふのくれ迄まで此方こゝのはからひ其元そのもとのお構かまひない筈はず、入いぬせむは無用むいようく、こりややいあこや、今日けふもまだ白狀はくじやうせぬよしは、て扱あひぶといなせいのぬ、去いながらそれもなわ無理むりとい思おもひぬ、義理ぎりと

情あはれを表あらわす立たるが遊あそ君ぎみの習ならいか又また賣うらるるしがつらいとて、なじみを重おもね
 た夫おとこの行い衛ゑついおふ共とも明あかされまいさ、さあきだ、流ながれを立たる女を、誠まことなき
 者ものと一ひとむき又また心こころへしやからもあれば、それらがこもも謙へんもうたてく思おもひ、又また
 同おなじ憂うれ伏ふしを勤つとめ、友とも傍そば輩ばいの顔かほよこしなどし思おもふてのとならんが、こしを
 とくどがてんせよ、景けい清せいがゆくゑ、存ぞんずべき者なればこそからめ取とりてせ
 んぞもする、有あらう又また白しろ狀じやうすれば、忝かたじけなくも鎌倉殿かまくらどのの御意ごいを安やすんぞ奉ほうり天
 晴てれのは奉ほう公こう、万まん人にんの譏そしりを受うけても君きみ一ひと人の心こころ又また叶かなはらぬ、其その身みの冥加みやがあしか
 らまじこしを能あたりまへて辨わかまへて、さつばりと景清けいせいがありか、此こゝ重忠じゆうちゆう又また聞きせいと物もの和なら
 ちか又また理ことわりをせめて、然しかもこたゆるせんぞの詞ことば、あこやり聞きてさつてもき
 びしい殿どの様さま四相しさうをさどるは方かたとい常つねと噂うわさ又また聞きたれど、あんの子細こらし
 い四相しさうの五相ごさうの、小袖こさそで又また留とどまるきやらぬといわだ口くち又また云いながせしが、け
 ふの仰おほよか、おれた、勤つとめの身みの心こころを酌しやくで忝かたいおつまやりやうなんく

のせい文で、景清殿のゆくゑ知てさへおるならお心よほだされつゝ、ぼ
んと云てのけふが何を云ても知ぬが眞實、それとても疑はれずバ、い
つ迄も賣られふわいな、責らるゝが勤のかかり、お前がたも精出してお
責なざるが身のお勤、つとめと云字よ二つない、浮世での有ぞいな
と、云よそべからこらゑぬ岩永、べりくどはつしやいだおど骨せひ
白状をせぬよ置て、此間の拷問よ品をかへて憂めを見する、聞ばうぬ
わくのいたいとな、よいく急度思ひ付た腹よ子の有かざみの格盤煎
買よしてくれふと、おどしかくれバ、そんな、とこのがつて苦界が片時
ならふかいな同じやうよ座よあらんで、殿様顔してござれ共いさかた
の雪と墨、重忠様のはからひととて榛澤様のけふのせんぎ、なにも懸す責
もなく六はらの松陰よて、物ひそやかよ義理すくめさま、といたり
りて、景清がゆくゑのと問れし時の其くるしさ、水責火せめりてたゑ

ふが情と義理とよひしがれて、此ほねくもくだくる思ひそれ程せつないとながら、知ぬといぜひもなし此上のお情より、いつそ殺して下さんせとくんと投出す身のかくごもて餘してぞ見へよける、重忠榛澤を近く召れ、か程心をつくせ共、誠を明さぬ上から目通で拷問せん、それくくと仰有詞の尾よ付岩永左衛門、やあく者共、あこやめよ水くらいつ用意くと呼べるよど、あつと答てしらすの内あをす梯子を見るよさへ、心のぼる枕の横槌、底のかたへの井戸やかたふかくもきしる絞車の、胸よひよきて氣をひやす、あこやが心の濁水今しも呑やどかくこの躰、重忠庭よあり立て、ぎやうくしえつまれく、あこやを拷問の責道具の、某かねて拵置たり、誰か有持參せよと仰よ隨ひ持出る、最もやざしき玉琴よ三絃胡弓取そへて、ねじめも嚙とえらす成、あこやが前よならべ置、岩永もぎよつとせしが様子いかいと打守れば、是さ女、其

琴ひけ重忠が是よて聞と刀を杖よおとがひもたせ岩永殿もお聞あれ
ど打どけて見へければ、こりや何ぞやけうがるは、責道具くどさんぞ
きびしいとかと思へば、聞へた拷問よとよせ自分の慰氣ばらしをや
らるゝな、天下の政道を取さばく決斷所での琴三絃、韓武以來あゝ圖な
ほたへ實誠せかいの有さま、天よ口おし人を以て言しむとい今思ひ當
つた、あこやめがくわいたい、もしもや此子が女の子あら、琴でやぐはん
く三絃で、なんとやらと京中が諷ひしは此前表、此上のばれ次手、ちよ
ちよげ、なんともよござんえよがの、と嘲哂す、重忠耳よも入給す、あ
こやなせ初めぬ、琴をひかねば、景清がありかを、いひ明す所存かど詞も
まげき重忠の、底の心、知ね共せひなく向ふつま、琴の、行衛を何と岩越
えいとも心も乱るゝ計、聲も枯野の船ならでかひなき、じらべかきなら
し、かげと云も、月のゑん清しと、云も月のゑん、かげきよき、名のみよて、う

つせど、袖もやどらず、重忠みしをそバだて給ひ、今彈ぜしハ、落組のしや
うかを我身の上も取、景清が行衛知ぬどな、まあ知すんバ知ぬもせよ、ま
て景清と其方が馴初しハ、いつの頃、いか成とのゑんもより深い契りの
中との成しぞ、是ハ又思ひよらぬか、いつたどのお尋、何とも昔となる恥
しい物語、平家の代と時めく春、馴れし人ハ、山鳥の尾張の國より永く
まき、野山をこへて清水へ日とくのかちまふで、下向も参りも道
ハ、かいらぬ五條坂、互も面を見知合、いつ近付も成共なく、羽織の袖のふ
へろびちよつと、時雨のからかさお安、いハ用、雪のあしたのたバ、この火
寒いもせめてお茶一服、それがこふじて酒一つ、こつちも思へバあちか
らもくどくハ深い觀音經、ふもんぼん第二十五日のよさ必とたハ、ふれ
の詞を結ぶなごや帯おはりなければ、初もない、味な戀路と樂しも壽永
の秋の風立て、ずまやあかしのうら舟もこぎ放れ行ゑんの切め、思ひ出

すも瘠つかのどく、うどましと語りける、さも有なん情の道、聞届しがせ
んぎの濟すまぬ此上の三絃さんせんひけい、いやさ此方の尋る子細を、聞ぬ内にい
つ迄もど、猶望まるゝ三絃のどふ成とか知ね共、思ひこんだる探みまほの糸今
更何とたがやさん、心の天柱てんじ引まめて、すいちやう、こうけい又枕ならぶ。
る、床の内なれし、ふすまの、夜すがらも、四ツ門かどの、跡夢もなし、去ても我
つまの、秋よりさきよかならずと、あだし、詞の人心、そなたの空よど、詠ながむ
れど、それぞと問とひし、人もなし、もふよいの三絃やめい、班女はんによが寐ねのかこ
ちぐさたへし契りの一ふし、時又取ての一興きやうながら云分わけのくらく、
西海の合せん又命を遁のがれ都又折々まじれ紛入景清、そちの度々あつふがな、平
家へ盛さかんの時だも人も知られた景清が、五條坂のうかれめ、心をよす
ると云いれて、弓箭ゆみやの聡とと遠慮えんりよがち、殊更ことさら今日日陰かげの身、わたしのもどよ
り河竹かたけの有が中もつれない親方、目顔を忍ぶ格子かぢ子のさき、編笠あみかさをこしよ

まめも有たかア、お前も無事よとたつた一口いふが互の、ひよくれんり
 さらばと云間もない程よせのしなない別路の昔のきぬく引かへても
 めんくくと落ぶれし、身の果哀れな物語、おはもじとさしうつぶく、い
 かさま是のかくもあらん、景清程の勇士なれ共實よ色にまあんの外、し
 あんの外、どふしあん仕直しても此通で済されぬ、それ胡弓すれく
 あいとこたへて氣の張弓歌の哀を催せる、時の調子も相の山よしのた
 つたの、花もみぢさらまな越路の月雪も、夢とさめての跡もなし、あだし
 のし露どりべのしけふりのたゆる、時しなき是が、浮世の誠なる、誠をあ
 らはす一曲よ重忠ほどんどかんよたへ、あこやが拷問只今限り、景清が
 ゆくへ知ぬと云よ偽なきと見届たり、此上よの構なしと、仰よあこやの
 涙盡ぬお禮を伏拜、重忠、白い共黒い共片付ぬせんぞを、あこやめ
 ん偽なしと何を以てゆさるし、此岩永の吞込ぬ不埒くと云ほくす、

其子細いふて聞ん、鼓つづみの五聲ごせい又通つうせすといへ共いっしょ糸竹いとたけの調しらべの五音ごおん四聲しせい又よく通つうじ直ちかきを以てうしとす、曲まがり偽いつはる心を以て、此曲きょくをなせる時は其香色ねいろ乱れくるふ、なかんづく此琴こご音有物おんあつものの司つかさとして人の心を正ただしし、邪よこしまを禁いさると白虎びやくこ通つうも賞しょう宏置こうちたり、こゝを以重忠じゆうちゆうが女の心を引見る拷問かうもん、十三の絃ひとすぢ又まはりからめて琴柱ことばしらよく、科がの品しちより十迄と斗と爲いぎんずるをひがととはすされまじ、琴ことの形かたちを堅たて見ればみなぎりおつる瀧たきの水、其水をくれる心の水賣すみう三絃さんせんの二上り又氣を釣上る天秤てんびん賣うり胡弓こきうの弓のやがら賣うり品しんをかへ賣れ共いつかな乱るゝねまめもなく、てうしも時もあひの手の秘曲ひきょくをつくす一ふし又彼かれが誠まことはあらわれて、知ぬとは知ぬ又立たしらべをたゞして聞取きこたるせんぎの落着らくじやく、此上こゝもふしん有やと道理道理又叶あひし詞ことばのしらべ、びん共しやん共岩永いんえいの、ばちびんわたまかく計かま宏ひろめ又成なりぞこゝちよき、重忠じゆうちゆう重おもて、あこやがせんぎ落着らくじやく

といへ共猶此上も某が尋問子細有、障分いたりやしきへ引ど、仰を蒙る様澤六郎いざあこや立ませいと、友なふ情數々の惠を思ふ女心、有がたふ存ますと、詞又つきぬ悦び涙、岩永の拍子もなくてうしよのらぬむつとづら、秩父は宮商角徴羽の五つよ叶ふ琴三絃、かしこき例引たりちよつかい、ばち利生有糸さばき直成道の「とのはや詫ぬれば、親したふ子の、かた膝行、身を立兼る音をぞ泣、うきみをこしよ岡崎の、かた邊井場十藏一幸が老母をばこくむわらやの軒母の何をか思ひ寐の彼唐土の顔回も樂みは似ぬ臂枕世又つき合ぬきさん、は引立る戸のすきまより風のみ通ふ計みて、まれよとよ人もなし、憂ふしを、身よそへ持し釣竿の暇有げよ見ゆれ共母の一人居氣遣と心の急ぐ井場十藏腰よの檻の、おもたきを、足元からく立歸り、是の母人、いつよないひるねなされしな、定て妹が身の上をあん、寝の、夢程もふ心休めは珍重く、此間よ釣

た此鯉を調味して、ほぜん上んと取出す、片足たらぬ眞那板も、とて漢人の鑄庖丁、棚からぐはつたり落たひなんぞ、其ひゞきよ目覺て母の起上り、十藏戻つてか何として遅かりしぞ、あこやがあの身よ成しより講釋も打やめ、一寸内を出ぬ人の適のるすなれど、心細ふ待かねるけふは先いづくへぞ、さればふと存付釣よ參りほらんなされ、此鯉を二こん迄終よ覺ぬ獵のきしやう、是も母人ほ息災延命の印と思へば、大分嬉しう存ますと聞て不興し、何釣よいて其こお取たか、それが母が息災延命の印か、是の又十藏共覺ぬ常さへ母が嫌の殺生、とよあこやが今のくるしみ、人並よ世を經る我ならば、その祈か、しこの祈禱生有物の命を助けしひぜんごんの果でなり共助たい、此時節面白そふよ釣所じやおじやるまい、かわいや其鯉がわごせよ釣れ眞那板よ乗くるしみも、あこやが六はらで賣らるしくるしみも、人と魚との名の違どくるしむ所よ二つ

ない、鯉こゝろのお蔭かげで息災延命いきさいえんめいありやいやでおまやる、年頃日頃の孝行かうかうもあ
いそもこそもつき果はてしと、身を捨背ねぢそむけて恨顔うらみかほ左様ひだりさまも思召おもひよさば御訶ごかり御尤
千万まじたま、全まじたまく慰なぐさの釣殺つりせうしやう生なままゝいひす、あこやがとよ願着ねがひあはせ有あは忘わすれなされしか、
今月今日けふけつけふの誕生たんじやう日、浪人なみのりの後もかたのとく貧まうじき中なかつ、尾首おしらの有搦物あるしほ
也共調ともていめでたふお盃頂戴てうたい致いたさぬ年もなし、殊ことも今年ことしのはや七十二ななじふにいは
ひば中納なかつま、來年らいねんのけふの不定ふぢやうの世の中相なかつまかはらず祝いはひ奉まもらんと、此間心
懸かれ共遠慮ともていで講釋かうしやくの仕つからず、ご一疋調びきとていん價あたいよつき果殺はて生なままゝ存ぞんな
ら、小鯛よなでも釣つては肴さかきよと存ぞんなれば、はらんはらんの如ごとく三年物さんねんものの鯉こゝろ三さんこん、鯉
の鱗うろこの三十六さんじゅうろく枚有あとや、二ふたこん合あせて七十二ななじふに枚の鱗うろこ母ははのは年ねんも七十二ななじふに、
都合つがひめでたふ是こゝろで母ははの誕生たんじやう日を祝しゆくせよと、八大龍王はつぱうりやうの賜たまはと嬉うれしく持もて
歸かへりし、十藏じゆざうも木石きせきならず詞ことばより出いさね共ともたつた一人ひとりの妹いもうとがくるしみ、
母ははの歎なげ悲かなしみが悲かなしかる、まいか思おもひやつてたべ母人ははと歎なげかば母ははの歎

ぞと泣なみでこままく語かたけるこあふ恥はづかしや、十歳じゅうざい早はやふ其鯉料理こいりょうりして、母が誕う生祝いざなふてたべ、悔くやしや訶しかつたわ詫言わがごとは悲かなしい中なかでよこくと笑わらふて膳ぜんがい
たゞきたい、雪ゆきの中なかの筍氷たかんとこほりの魚うろこ、唐土人たうとこしびとの孝行かうぎやうも劣おとしりいせぬぞやれ十歳
とは云物のいちらしげは鱗うろこの數かずど我年わがとしど同おない年とし、いかよしても殺ころされ
まいは身みが出世しゅっせも此鯉こいの龍門りゆうもんの瀧たきを上のぼるとくわやかつて命助いのちすけてやり
や、此盃はんをこふすゆれば幸さいまきゑの鶴つるの料理りょうり、心こころで祝いわふ千代ちよや千代親ちよおや
子こめでたふ盃はんせん、酒さけがなと有あければ、詫言わがごととい勿な躰たゐない、お心こころとく
れば此上こゝの大おほけいあし、酒さけも則すなはち用意よういせりとふこの内うちより取出とす、徳利とくも
餘あまる悦よろこび貌かたちとよもかくよもは心こころよ、背せかぬをけふのは馳走ちそう、てい主方しゅ
ま一人有あると下屋げよか、け入いはおりかた手てよあたま計はかりの食籠じきろうも、とさん
よとのかけ盃はんわびしき中なかは假初かりそめも禮儀れいぎ乱みだらぬ親おやと子の昔むかしの育そだちおくゆ
かし、是こゝはなつかしや、景清けいせいのは身みよもらかせしはおりならずや、され

ハ其時ヤせしは、是を打懸景清が孝行も一所と頼置たれば、此座又置ハ
是は景清、今日のとぶきてい主二人と思召、先盃お取上いざお酌仕らん、
日頃は開召れねど今日ハ半盞はんざん、忝はない、酒は愁うれひのほふきとせせハ暫
もおきばらし、其お盃ザン景清載いたて、直す返進へんしんヤさしめせといふもつぐも
かた計さらば盃お取次着きなく共盤殿ばんの盃、まお錢ぜにの廻り程是ハ
つぐまいと、存ながら又はんさんしたり静しずか、あがらいで、誠まこと又下戸げこの
むいき呑のみすぐ又私わたくし頂戴てんたい、手酌てしやくハ恥はぢの物、是はらんせと、さりとくんで
ついとほし憚たがひながら又返進へんしんハ酒ハはきこん毎年うたふおさかな、今年
かいんも心がしり世上の聞へもいへば随分と聲こゑひく又、母ウチハ千代ませ
くどくりとを祝いはひうたの、面白おもしろの時代や、嘉例かれいの着きめでたい、取とじ
や又母も一つ受呑のむと、いならず是はつけざし、是ハ有あがたいといたなき
く、すつとほし然らハは意い又任せ盃ハ是迄、餘りはきげんよい又付近

比不孝な願ふれ共、中上て見ませふが、中隣分下されど飛走さつて手をつかへ、中あこやがこんどのくるしみの景清もゑんを結むすんだる故、といふて重おもくの大恩有景清が行衛知ても云まじ、増まして存せねば責殺せめころさるゝのあんの内、私つくゝ存るゝあこやが腹はらのな是と承うけたる、いかなく殺させてい母も我も景清は何と面を合すべき、然れども力わざよい、いごかしも助もならぬ、所を何の苦もなく助る極上との分別を極それし、某あこやが責せめられし彼かのあこやの松と京童わらんべの異名いみなを付し、六はらの松の下よて腹十文字よかつさ調ばき、上總調の七兵衛景清運命うんめい拙たく、とても頼朝を討と叶なぬ故、腹切て相果はらる者也、如件たんのごとしなど、似つこらしく書置を殘し相果はらば、レ景清切腹する上のあこやも用なしと、命助るのみならず、京都鎌倉心を赦ゆるせば、ゆだんを窺うかがひ、景清殿安やすくと本懐ほんくわいを達たつせられん、掌たぎらうを見るが如し、中一日切腹を急げば、一日妹がくげんを助る、とつくや上んと

存せしか共親子一世の此世の別れ、實て快ふは誕生日を祝ひ納て後のと
 とし、今日迄色よも出さず思ひ初し其日より、一日を千日万日どのつゝ
 そつゝ待かねし、今日只今より誰か我よかいつていたなりはこくみ奉
 らん、尤妹の有ながら女のと、かたゝの手の落たやうと思召、歎が積つ
 ては身のくづをれそれがこふ迄て又妹が悲しいめを見ようかとおん
 ぞつゝくれれば身も世もあられず、悲しけれ共始からない十藏玄やと思
 召明らめ不孝の罪をゆるされ、命のお暇下されば有がたからんと跡云
 さし、胸迄ぐつぐとつゝ懸る、涙しらせじなき貌見せじとさしうつふき
 疊よ、くい付願ける、母のしほるゝ氣色もなく、其詞遅かつた十藏けさ
 の云ふかばんよの云かど、毎日ゝ待兼て思ふよの、心が付ぬかいやぬ
 かる者でもないど心の内でどつおいつ親子の中も侍よ玄ねと教るの
 耻も有遠慮も有、いつ云ふてくれるとぞやど、今迄わとせが立身出世を

待たやうと待兼し、母の誰がなふても飢もせずこゝろもせぬ増て妹が
ゐるからの跡あんぢるとみぢんもない、未練な心を残さず共いさぎよ
ふ腹切て、景清の恩もほうじ妹が命も助てくれといふとて妹が助たさ
ぬ死ねと云でい更くなし、箸折かゝみの眞實の我子兄弟、月日と力よく
らせしもの、夜計がよからふか、晝計でよからふか、夜晝がわれバこそ立
世の中よ老の身の、かにいさよ隔いなければ共妹が腹よの男孫か女孫か、
は身が爲よの甥か姪か胤の景清の預り物、それ殺すまい計よ死ねと云
合點か、幸と其盃又歸る旅ならば母が呑でさすべきが再び戻らぬ死手
の盃、一つ呑で母よさせ進せんと立上り、胸と一所よ踊鯉を鉢よ入、十藏
が前よすへ、今しぬる身よ入ぬ咄おれ共物の聞て置ふと、わとせが祖父
様わらはを縁よ付給ふ時、切腹人の今よの鯉の濱焼をすへ、飯櫃のふ
たできうじすると故實也、聞て置と物語、人の上でも有とか我子の役よ

今立た此鯉のけふ釣つまかりしも思へば天のあたへぞや祝いふてすわ
 つて早ふいてきれい又死ぬらばくくと目をとちて重かさねて詞もなかり
 けり、有あがたや望叶のぞひし我大けい、死後の見ぐるしからぬやうとても
 のとよさつぱりと、まぞり又月額さか仕らん剃刀かみ砥石とどのいづくよと尋れら
 ば、それよからふ今生こんみらいのはれの月額、母が剃そておませふと髪かみもみ
 やれ、この冥加みやうなや生々しん世々のほかたみほじたい仕らぬと鹽取しほ間も
 有あやなし走はしの水まさしかりれば、母の末世の手本とあれ武士のかいみ
 と鏡立かがみ、砥る剃刀たづな携出へ磨とも磁まがも弓取ゆみを、子又持親もちの皆これと思ひながし
 の合水あはせ、けふ別れてのあふとの、かねよりかたき合砥あはせや、力涙ちからを押包袖つくりよ
 袂たもとよ手合てあはせし、サア十藏じじと有ければ、思おもひ乱みだるゝ黒髪くろをもんで鏡かがみ又打向うちふ、母
 の後うしろ又立廻たてまわり、なんど十藏じじ、親が子供のかうぞりのほんの月額さか、逆剃さかよせ
 ふかいの、フイヤ若いわかが先立まも老たるが殘のこるも、此方ここそ逆さかさまと存ぞんれ

共、皆前生から定つた直剃すくもなされ下されかし、心へしと老の手のふ
るふを見せじ、ふるのじと二剃そ三剃そ顔と面、互まも移うつる鏡の内いやなふ十
藏たくいくつ又成ても面おもかけの残るの昔の幼顔わかちがはあてよならぬは額ひたいの黒子くろこ、
見通みとおしの法印ほういんが六十八迄請合し其命、まだ半分も立たずこんかことが
有ふどの、神佛のなされた八卦はつぱも間まも虚うそが有かいの、ぶおかしいで
の有わいの、いや私わたしの八卦はつぱの合ぬをいかふ嬉うれしう存ぞんます、先年國元くわんげんで
大病おほいびお煩わづらひなされた時、百人の醫者いしやは百人陰陽師いんやうし山伏さんぶつ名僧なそう智識ちしきの占うらなひも、
は本服ほんふくと申者まをすの一人もなかりしが、は快氣くわいきも間まもなく七十二迄は息災そくさい、
此やうなめでたいとのござりませぬ、いやればそれもそふ、其時參つ
たら今日廣ひろい國へ主ぬしづいていきやる、嬉うれえいさかやきあるまゐるまい物、長
生いさしてこんなめよあふ、めでたいぞや、何か云間うんまも時ときうつるさかやき
そつてしまおふと、まこりやいつの間まもみ直なおしやつた、いやもみ直なおし

ハ致しませぬ、でもひつたりとぬれて有、それはお前のあの慮わいのお
れがなんのみぢんもなきやせぬ〜といふ聲くもる鏡の内、互も顔を
見合て笑ひを作るきり立る、老の手わざのかよひきも刺刀かみそりばやよそり
なせり、是こゝからは聳の景清殿大國の所知入しよちう、まさかの用と嗜たしちみしはれ小袖
召せんと取出す、心のやみのまつくろ〜縹しほかくれ隠行だてばかり、行長ゆきながあひ
てのつしりと大小さすが浪人の昔か々やく金作づくり十藏たぢやう、忽景清と見か
す計見へよける、物數いひ老人のもしや心も乱れんと門かどよ出、是こゝ迄養
育の恩海おんうみよくらぶれバ蒼海そうかい淺く、山やまも譬たとへれバ須彌山しゆみせんひくしとサせ共、
命は又義よよつてかろしといへり、妹がとひやよ及およずや上度數かみの來
世のこと、日の内うちの清水よくらし切腹せつぷくのくれ六つの鐘かねを限かぎつて逆さかさま
なとながら、はゑかひ頼奉ると云捨つしと走行、母ははのついでいて走出でしで、レ
ばし待物いはふ、おうい〜呼よぶと答こたへず餘あまも、涙と年のうときめよ其行か

たは見へざりけり、あつと大地又伏轉鬼よこまがりもせよ蛇へびもせよ死又行子をいてまねと、歎なげかぬ親の有べきか、女なれ共侍の親も生れた身のいんぐり、泣たいを得泣なずりくついふたり笑ふたを、誠の心と思ひしか、狂氣半分はんぶん死んでおたのやい、出立た姿すがたいつわすれふ、千騎二千騎の大將とあをいでも、不足そとない子をかひいや一生ひんく又埋うづらせ、鎧甲よろかざとさせあんだが悲かなしい、いつそ不孝ふこうも有たらば是程思ふまい、孝行もまてくれたが今で、結句けつご恨めしいと、涙の限聲限、泣ていくとき立て、轉ころやる方涙又伏沈ふしむかゝる所へ、榛澤はんざい六郎成清、あこやをかよいたのり來り、傳つたへ老母、あこやが身の上せんぎ落着らくちやく致すよよつて送りかへさる、併しか胎内たいないも子をやどせば平産迄へいさん他國たこく叶こはず、男子出生なら、決斷所けつだんじよへ訴ふべし、女子又置いて、構かまひあしとの誑意ちやうい成などとあこやを引ひて渡わたさるれば、のふなつかしや母様とすがり付たる嬉しなき、母の仰おほ天氣てんをうろたへ

まめで戻つたか、嬉しやの悲しやのこんなと知たらやるまい物、六はらんどつちぞまだ十藏が日はくれまいか、よふ戻つてくれたな入相が死だらなんとせふ、兄が鐘の鳴まいか、と何を云やら氣もそゝろよ、よそまはならぬくれ六つを胸よどんくくく、つく計、母様それの何おつまやる、いかいおせは六郎様へお禮く、と氣を付れば、ほんよくと手を合伏拜より外ぞなき、久よよての對面うろたゆる程嬉しい筈、あこやを渡せば他も用なしと六郎の下部を、引ぐし立かへる、母様悦びの道理ながら其様よなせうろく、なされませうろく、せいでい兄の腹切よいたのやい、そりやまあとこへなんとして驚けば、そあたの命助ふ方便、景清も成かりつて六はらの松の下、日の中、清水でくらし、入相の鐘といつ時、腹切筈、かふいふてはゐられぬとかけ出して、とうとこけ、歎よよはる足よの車あこや悲しさやるかたさく、戻ると其儘なせ

云て下さんせぬ、女の足でもつい一走わしがいて暮れぬ内、兄様つれま
して立かへると、ばやかけ出すおのが名のあこやの、松へどいそぎ行、こ
こよ過つる元暦元年源平の戦ひ壇浦^{だんのうら}まで、上總七兵衛景清^{かづな}又出會不覺^{あひま}
をどりし源氏の侍、みかのやの四郎國時^{よしか}其身の恥辱^{ちじよく}を願^{かへり}て、陣所^{ちんじよ}又歸ら
ず直^す又逐電^{ちゆうでん}してけるが、景清世^{けいせい}又ながらへ都^{みやこ}又さまよふと聞しより、
憤^{ふん}をどげ弓箭^{ゆみや}の恥^ちをすすがんと、ありかをさがす京巡^{きやうめぐり}りけふしもこし
を尋來^{もとめ}り、あふぎのはし又書付^{かきつけ}たる心覺^{こころしづ}ひらき見て、岡崎^{おかざき}の村^{むら}はづれ
北^{きた}を受^うたる一軒屋^{いっけん}、西^{にし}又敷垣^{ふきかき}入口^{いりぐち}又井^いの字^じの印^{いん}有^あぞくと打^ううなづき
内の様子^{ようす}を窺^{うかが}ひ、主^{あるじ}の老女^{らうにょ}が年恰^{としかつ}好^{かう}是^こそとつしと入^い、あがり口^{くち}又踞^{しりぞ}
老女^{らうにょ}、あこやが母^{はは}は儕^しよな、聳^{たか}の景清^{けいせい}八島^{やしま}の浦^{うら}まで、箕尾谷^{かきおのや}と軍物^{いくぶつ}語聞^{ごき}及
ばん我^{われ}こそ其箕尾谷^{かきおのや}四郎國時^{よしか}景清^{けいせい}がありかをさがす、又鎌倉^{かまくら}よりもせ
んぎさびしく、秩父岩永^{ちちよ}が承^{うけたま}はり、あこや又ありかを責問^{せめと}るし所^{ところ}、白狀^{はくじやう}せ

し共せぬ共取々の風説ふうせつそれのともわれ儻が知ぬとよも有まじ眞直まっすぐもぬかせ、知ぬなどし偽いつはらばまの首捻ねぢていんせんど、おどしかしれべきよつとして、いや知ぬ共存た共、どかくの返答へんとうあきれ果顔はてを、詠る計也、きやつ知てどぼけるか、あらぎでい行まじと分別し面色めんしよくを和やまらげ、老女らうにょこしを合点せよ、箕尾谷むこい心持たれば、むたいよつれ歸り人質にぢよ取り景清が心をしぶらせ聞出す仕やうも有、又、すつぱりと切殺し、景清が外姑しちごの敵となつて出る仕様もあれど、咎とがあひ人を殺しひけうを働たくらく我ならず、手近ふいへバあこや殿とゑんがきれ、のけバ他人の景清身はくづれふどかくしとげふと思ふは五十年さきのかたぎ當世の川流かわながれさらりく、合点かお袋ふくろと氣を赦ゆるさせてたらしける、ム合せ物の離物はなれいのしやれば、そこも有、當代の昔どちがひ、弟子でしの器量きりやうの有なしも構かまはず、弓矢打物の大事さへ金次第かねじだいで傳授でんじゆするげな、氣のさばけた世々やとざらぬか、

水心あれば魚心有、問様も心あれば教様も心が、有そふ奇物の様も思はるし、芝やござらぬかと、詞の謎をどく呑込路銀のさいふ取出す、じつとまりめも懸ながら猶見ぬ顔の空とぼけ、いやなふお袋知ぬ所へ初て参り、ふみあらししたばこをあらし忝いと、一包膝元もそつと置、苦もなく取て指先もひねつて見、誠も是は茶の金そふな戴程の重みでもなし、コレ人のありかを訴人すれば、囑托の大法さへ判金七枚も極つた世の中茶の錢計なせ極らぬでござるぞいのおつと茶の金香こんだ、判金七枚と左いふの包取出し、前もならぶる折こそあれ、あこや十載も尋逢互の悦びいそくと立歸る庵の内見なれぬ武士も見なれぬ小判、こいいかよどうかつと兄弟得這入らず内の様子を窺ける箕尾谷悦び望のごとく此金を渡す上、景清が在家を知せ我も討せ、此みおのやが願かあへてくれ、神佛も貴い金を、大ぶん取からの教ませいでなんとせふ、上總

の七兵衛景清が、ありかは、爰こゝも有あり、十藏大音おんじやう聲こゑも呼よつてかけ入いり、珍めづらしし、箕尾谷見忘わすれまか壇だんの浦うらまで見参けんざんせし景清、汝なんぢ弓箭くわんげんの恥ちを思おもひ付つ狙すといとく聞きたり、今いま廻まりあふいうとんげ、鬱憤うつげんをはらせ相手あひまも成なて得えさすべし、サア拔ぬせうぶと詰つめよつたり、敵たかも詞ことをかけられて、箕尾谷ひしおなじかは臆おそすべき、拔放ぬきほうさんといしつれ共壇だんのうらの戰たたかは、互たがひの姿すがた甲冑かこうの昔むかしもかはる形像かたち、それかわらぬかいぶかしとためらふけしき十藏じじやういらつて、臆おそれしか箕尾谷、又臆病おくびやうがおこりしな、性根じやうねを付つてくれん、亦またひらりと、拔ぬて打うかくる、母ははもあこやも心こゝろくれわつと、叫泣さけび計けい、兩方互りやうはたがひも秘術ひじゆつをつくし、打うぞと見みへし十藏じじやうが、刀やいばの金かねやさゑたりけん、つば本々ほんほんほつきと折やて飛とちつたり、十藏じじやうつかをからりと捨す景清けいせいが運命うんめい是迄也このまじ、首打くびうと指さのぶれ、神妙しんべう也、景清けいせいとふり上ある刀やいばの下眼したまなこをどぢたるつら魂たまつくくと、打守うきまり、主君ぬしきみの仇あだを報はらせんと、鎌倉殿かまくらどのを狙ねらひ、景清けいせい刀やいばが折やたらば指さぞへも

有命のかけがへも有様と首さしのべし、いやく、みをのやが
一こしは、正眞の景清が首を打で、叶ぬ刀、紛者又は得よとすまいと
さやと納、儚景清もふ取置と一分別有其有さま、一器量有おのこ也母の
手を打、よい分別や眼力や、其男の十藏と云我むすこ、誠の七兵衛景清
がかく、れ住所は、清水の後堂より本堂へ是かふまゐる、左りの方と折た
る刀おつ取て、ぐつとつゝ込乳の下かけて引廻す、悲しや是れいと驚き
さはぎそも何故のほ、然がいと、兄弟すがり取付ば、このいかにとみ
かのやもあきれ、果たる計也、母のくるしき息ながらやれ兄弟よ、其金を
路銀として、景清のありかを尋ね、母が命の有内よちやつといけ、る
嬉しやまんまど仕おほせた、かふ云たら、箕尾谷様さぞやさぞ憎からふ
身を切刻くだかれても、元より知ぬ景清のありか教ふと偽し、兄弟を
尋ねやる路銀と金とらふ大語大ぬす人、あのバとめづた、よもどお

ぼしめそふが、かひゆふてくどふもならぬ、子供の爲むこの爲語も成
 て死る母が心、子を持って後思ひやり其時恨をはれてたべ、兄弟よ、千日
 千夜云てもなごりは盡ねど皆あだど、かまへてく心を合景清を見立
 てくれ、是を云てしまへバ心よかすると浮世もないと、詞の涼しく心の
 よいる息も切、此世の別と消はつる、あこやの更も夢現辨知す取乱しわ
 つと計も伏沈む、十藏のみおのや又泣面つしひはまもみぢ胸は時雨よ
 雨やさめいり木ならねバみおのやも、敵の敵金の金死す共是式も丁簡
 も有べきを不便の母がさいごやと、よそめ遣を頼もしき、やも有て十藏
 金おつ取物をも云すみおのやが前も置、返辨の心尤也、此上りやると
 云共よも受まざと立て死がいの前も置、七日の吊金七、四十九雨
 の香典死人も手向る上からの禮を受ふやうもなし、思ももきせぬ來世
 がね受悦んで成佛あれ、扱某は参りやと立出るけみおのや母も手向の

情なさけのあれ共景清を狙ねらは邊へんなれば、此十藏じじうざういつ迄まも妨さまた入りるがつてんか、いふよや及ぶ老母らうぼが愛心あいしんよめんじ狙ねらまじ討うちまじと云たけれ共我も根井ねいの太夫たうふと云親有、我ゆへ江州へ蟄居ちつきよの身、景清を討うちてくいのけいの恥はぢをすしがすんば、孝行も武道も立がたし汝等兄弟景清ぢやうぢやう又廻まわりあはし、かく付狙ねらと云聞せ必用心ひつしん怠たるな、十藏じじうがつらをとつくど見置人たがへして、悔くやなよ、何さく千体佛せんたいぶつ程ほどあるとても、一念いちねんの眼力がんりき誠まことの景清討て見せふぞ、見ごと討か儕おのれ見ごと妨かど、思おもはず兩方反打りょうほうはんうちてつめ懸かる、あてや立出互たていよなだめなだめられ別出わかるも、止とどまるも共よかいなきはしきいの有どの見へてなきがらをふるいついらよ法のりの道、心は綱代あじろのそう禮らいごと兄あにが歎なげけバ妹いもうとの、まそつとまづしい野の送りでもどうろうあり共とも有物をど、くらむ心のともし火ひをのりの光ひかりよかき立て、あくくよなひもろ聲こゑよ爾時にじ無盡意むじんい弁べん即すなはち從座じゆざ起あり偏袒へんだん右眉みぎまゆ合掌がうじやう向佛むかひにぶつ而作にさ是言こゝろ世尊よんそんく

いんぜ音弁大玄大ひを引導みちびきふ、此世を離行旅はなれと人を尋ふ行旅と道みちの、二筋かかれ共涙なみだひひとつ一筋の誠の道、こそしるべなれ

○第四 道行旅寝の添乳そへち歌うた

はしきいの有とは見へて、あはぬとは代かのながめの、たねあれど、わが身ひとつにつれなきと、思ふ心の松の名や世もあこやがつま思ひ、つとめの中うちのまことより、もふけしたねのちござくら、うるの子持のかいえよなき、姿すがたを人のそしりぐさ、さがなき口もおのづから七十五日はや立て、けふ忌明いみちあきのとぶきや、うぶすな詣もろでよかこつけて、うよその「人を、尋行あてども長の、旅なれど、ついすげがさよざうりがけ、あんじるよりもやすやすと、思へばからき三條のはしも後うしろよ遠とほざかり京みやこのなごりと見かへれば、跡あとよ退付おひ十藏が、日がさかた手よふりつゝみ、まだ持遊び、えらぬ子よあまやかしたるおち様どたがひよ、わらひあいた山、こへてぞこゝよ

退分や大津繪めせと旅人の心をえべしつなぐよぞさして、おしまぬせ
ぜの町せたの長はし、かゝる身のおもき思ひを、いのれとや、そなたよ立
る石山寺なむくいんせおん菩薩、大じ大ひの恵みて、やひばよしづむ母
上の、みらいのやみもはれ渡り、真如の月のかのさしよむかひせ、賜へと
伏おがむ、袖も露けき、春の野よおのがありかをしれよとて、つまこふ聲
いけんく、ほろく、子を思ふ身いねんく、ころく、なくなしらいそ我ふ
どころよ、ちしたる春の、日影を受て、そだて上なんらバがもち、くさつを
早く出はかれて、右と左へ二筋の道の、わかれしわがつかまも、あふみと計
まらま弓、いづくをさして行なんと、あんじ迷ふも道理ある、十藏ふつと
思ひ付まだいのかけなきみどり子の、心の正直正路みて、神や佛の恵も
かなふはぐしの氣結び、辻占といんと立よりて、心よ右を尋れば、かはを
えせんとそふけたる、かぶりたこのよしなしと、又とふて見る左の道よ

つとゑがほのかゝみの山、うつる心よまかせんと、行道もせり、初花はつばなのふ
 ぶきも深くもり山の梢こすえ残らず色めきていとまほらしき、里のわか嫁よめ、小
 娘達せうめたちが春の物とてはやり歌、からもやまとも、ひさも都もぬれのさたさた、
 ゑくやさし、ちんないろく、すいやく、まゆくのかゝみの、おのこ和わ
 女郎ぢやうらうがよよすだんかうかうゑちがり、こへてたかみやの、町よどりの二
 柱はしらおたがじやくしの森もりまげみ、はるかそなたとぬかつきて夫おつとの命長か
 れど、守まもぶくろをかけまくも、かたじけなしとゆふつげの、とりもとのま
 ゆく、やぐらべし渡りく、て見あぐれば、雲くもをぬひ行すりばりのとうげ、
 はるかよ夕がすみ旅たびの心のいそがしさひとり打たりまふたりのかは
 を過行長あり手、たつしぢだうをめあてよてたどり、行身の「たよりなき
 住よしの橋の反そりたひ大工からかや木からか、木をけづりかんなくくれ
 べかんなからかもしらぬゑ、まらぬるなかも、ずめば又、我身一つの都ぞ

と心のいそぎのべし置、悪七兵衛景清が人よふしんを打れじと、ふしん
通ひよ身をやつす、在所大工の中間よ入、脊高くと異名をよべれ、なが
れ渡りの手間しごとけふもほうばい打つれだち、ふまん場を早申の刻
くるよふおそき春の日の、ぶらくかしこよ立歸る、たつた今迄くの
んくした空で有たが、聞へた狐の嫁入のそべへ雨、はらしていかふ
と辻堂よ立よる内の高咄し、中よかしらと思しきがはり肱かまへ分別
がほ、ちらが出入のしごとだんな根井の太夫大彌太様、お名が大彌太と
いふよよつてめつたやたの大やしき、此度のほふしん、鎌倉の頼朝様
がおこしかけふとおつぎやる故、物入かまはぬ結構すくめ正眞の大名
ぶしん、皆もすいぶんせい出しやれ、手間ちんはもうけ次第、脊高そふ
じやないか、いかよもこなたのいりまやる通ぎや扱あの根井の太夫殿
はどう見てもあほうぎや、それをあせといふよ、鎌倉の頼朝様がおこし

かけふとおつしやるなら、ついあがり口を一けん程ふしんしてすむと、それもやかまししい床机一脚あてがふたら、ゆつくりこしはかけらるるよ、いかよかねが澤山などてあだづいゑな大ぶしん、但頼朝様のごさるといふの世間への云ふらまで、あの内よござる娘は又聳殿取ては祝言、其はこれのふしんぞやないかどよそあながらうらどへば、文盲な、お腰かけらるしと云て常体の人間どいちがふて、頭さへ大きい頼朝様、この廻りの思ひやらるゝでつかちない物で有ふ、此様なとてふしんがあけりやちちどが中間も立ぬてや、またがまあよろこびやれならの大佛のこん立成、是から段々興福寺のぐいんと玄のと、大王の秋が入てくる近年よあいつかみ取、是といふも番匠の始り太子様のお影、此度七堂がらん修覆よ付大工中間一統よ手間を御きまんとが、めいゝの冥加の爲、一年よ六日づゝあたま役よ廻つてくる、おらがばんよ當つたら戻

りみやげのめいぶつのほしかぶらかふてこふと笑ひもどつとはれ渡
る、雨のあしもとよはくとたびあわこやが兄弟づれぬれみかはさみ
すげ笠の辻堂よさしかくれバ、互に見合す顔と顔、景清ちやくとこは
あ旅のお乗そふなが雨よあふてさぞ御なんぎ、まわこしでゆるりつと
日のくるし迄やすんでござれ、お連もせかすどくと目で知すれば吞
込十藏、お詞よあまへてゆかねたとなれ共、火打があらバおかま下され
一ぶく吸付やたし、いやく、火打の持ませぬがよい事を存じ付た幸有
合檜の切、さりもみよして進せふと道具箱あぜかへせば、ほふばい共口
口よ、いやせだかめがたばこの火で旅の女中こまづける、あの抱た子が
目よ見へぬか、れつきとした男をはなの先よ置ながら、ふづくりかける
大たん猫のむきへお見廻す鼠じや迄、それく猫で思ひだした日明て
ぬる蛸へ、ほでぼしを突こんで迷惑するを見るやうな、構はずと置てこ

いと笑ふて、皆立かへる。跡は三人詞も口より、是はなぶじでけんごでよふまめでゐて下さんしたと、あこやの夫又すがり付まべし、涙よくれけるが、なふ此様又廻り合はぶじな顔いつか見よふとたつた今迄あんせしよ、是と云も年頃日頃はん音様をねんじた印、一ついにかい兄様のおせわのかひでやゝ迄うみ、親子兄弟一所へよるよ付ても母様のと、詞を残すくもり聲、景清外のみよも入ず、年よられたる母人同道なきは第一のきがしり、まてし、まさいは十藏様、されば、我母女よのまれなる最期、いやもふ是は順の道、まさいのあこやよゆるし、と聞われど、愁をよそよくろむれば、景清はあ、膝を打て、残念某日陰の身ならず、都も有内對面、智姑のは盃責ていたくものならば、是程よは思ふまじと男、涙のくりとよ、あこやも今さら十藏もつきぬ歎を押かくし、扱まわ何からやそふやら、なんぎのうち、の悦びとあこやが平産、あた

り近所の介抱かいほうまで漸あやうとすくだしせ、うぶす奇詣きよでと偽京いつはりみやこのすいとぬけた
れど、貴方きほうのゆくゑあふみど計かへどこをまやうとし思おもひしよ、ふしぎよも
廻めぐり合あ天道てんどうのほ恵めぐみ、此上こゝの珍重ちんぢゆうのあいらまう生なれた此子こゝ、手渡てわたしやが我
等われらがみやげ、指似しゆにを置おけてきたのそ、もとのさいくのわざ、あのをやうよ
よこくと、笑わらふ程ほどよそだて上あたの伯父おぢがま、是計こゝは恩おんよきてもら
ひよやならぬと笑わらふて見みすれば、其元そのもとへのほ禮景清れいけいせいが口くちでのすさぬか
くの通とほど、頭かぶをさげ手てをわかへ、扱あでかしたのあこやが心底しんてい六むはらへ引
出ひされ拷問がうもんよあふぞどの、人の噂うわさよ聞きつれ共心ともこゝろよ悔計くわいよて、憂うれめをすく
ふまがしもなく無念むねんの月日つきひをくらせしが、今日けふ只今ただいまめぐりあふの操あそびの
徳とくあつばれていせつ過分あやふく、なふ其お詞ことばたつた一つ聞きふ計かへのまんぼ
ふ、つれそふ女房にようばうよ過分あやふとい勿躰なつか赤あかや忝かたじけなや、此子こゝも心こゝろよ悦よろこぶやらち
りまそふよ吞のんでゐる、顔見かほみてやつて下くださんせと云いどいもせの誠まことなる、景

清重て是なふきかれよ、某が日比の願望追付、成就の幸有、此長濱のかた邊、根井太夫大彌太がゐん居屋敷へ、源のよりども上洛の次手、又立よらんと、風の風説、聞とひとしく飛立計、何とぞ根井がふしん、又入込、との様子、を伺はんと、思ひ付より、俄大工、すうきを以、此程より毎日ふしん、又やと、わるし、身の幸と、悦ぶ矢先、かた、又廻りあふも、ふしぎの吉さう、思ひこんだる念を、以根井がやかたのあん内覺やすく、狙頼朝が首取て、平家又手向ん、七兵衛が積りぶしん、たしみこんだる胸の一圖氣遣有なと、語るまど、いさぎよし頼もし、それ又付て十藏が、一つの計略思ひ付たり、是より某東國へ赴き、頼朝が上洛の道中へ出つく、いし、悪七兵衛、景清となつて、狼藉、及びあべ、供先しゆ、この大小名、我討とらん、必定、景清の亡びしと、頼朝も心をゆるし、根井が館、又入來らん所を、狙誠の景清、本望をとげ給、いづつながる縁の某迄、共、高名の數、又入武士の大

けい是又過じ、あこやをば身又渡す上り、どかくの噂隙づいへ是より直
又罷立、妹さらば景清ひさらば、天晴の心ざし身をすてゝの親切、此上
はどいむる共とまらぬ氣質の十藏殿、旅立の餞せんと道具箱の底より
も、かくし置たる一こし取出し、おなか大工の七兵衛が嗜道具のだん平
物、鎌倉表のふしんのはれさいてござれと指出せば、忝しと押藏、之を
ぼつ込讓の道具、さいくは流し侍の名を、万天又上ぶしんいさむ、心の内
ぶしん退付手がらを立揃、家わたりがゆのまめの數くひ當、かみ當、高名
せんと心も似れば形も似る、二人が姿ゑんのつる、瓜を二つの景清十藏
立別てぞ「行水の、さゝ波の國共讀し近津うみ、所の名さへ長濱とは代を
祝ひし家造、あるじの心廣庭よ、うつし植たるいとさくら今をさかりと
はびこりし、ねんぬの太夫大彌太がいんきよといへといよしへの、かた
氣の殘る大みやうふしん、かすく多き作事の内かこいあるじのもの

のすきとて、ものよねんしやのねんるの太夫こしもとはしたよ手傳てつたのせ、手づからむすぶかべ下地くだち、是でよしす、こゝへ一本ぬをくど此竹節たせの付やうが至極たぎく、こりやできた面白いと、きげんよこゝゝわらひない、しやんと結んでふつつり鎌かま既すで又指ゆびをやらふどしたと指置さしおきバ口くちよ、遊あそバし付ぬ下したのこれ手業てわざお慰なぐさどの云乍いひまがらおけがく有てり、お姫様ひめのおきも玄くろのふまふ是これでお仕廻遊せまわいらがどの道理を知ぬよよつてさ、此度のふ玄くろんな、忝かたじけなくも鎌倉殿かまくらは上洛かみのお次手ついで、此ぢいこのぢいが隠居かくしよへおこしかけらる有がたさ、かべ下地くだちでも自身じしんよするが賣せてものもておしもちつと玄くろや手つだへど、又云付る主命しゅめいよ、いや共いよすたづさへて、まんき玄くろの竹斑たたら竹まどふかづらの永き日も、はや九つかふ玄くろんバの拍ひ子木こぎか、ちくひる晝休ひるやすみつちも、匠ちよんの斧のも玄くろづまれば、ふしん小屋こやの晝食ひるじきじぶんな、ばん迄までもかゝろふと思ふた此窓まど半日まひよいはかいきく、扱あ此かべ

いどのさくわんめ云付ふぞ。すきやの上ぬりはれの物と獨つぶやく
目通へ、小ごしかめて慮外ながら、此かべをぬらんず者拙者ならで外
よなしと、こてひらめかしすきみ口かべ訴訟とぞ見へよける。有あふ女
中せうしがりは是くかべぬり、殿様のおそへ近ふ、づきんもとらず、彈千万
下りやく、六さすが女中とて物の作法知ずじや否、若衆の紫ぼうし嫁
ひ領のわた帽子とも僧のあみ笠、さくいのづきんはぬぐがぶしつけ
ぬがぬが禮儀でござりますすと、云又大彌太打うなづき、是のさもあらん
と、して其方の此間又見なれぬ者じやが、けふ初てのさくわんか、得手我
やうなひやうげ者の口バつかりでさいくのあか下手、かこひの上ぬり
がてんがいかなぬ、是のお情ないほ一ごん、正眞の口も口手も手どやの拙
者がと、先ほさいくの地下窓、見た所が地黄丸屋のかんべん形水のへり
よよござりまじよ、よしすのもやうにくづれごうし、此取合よのあつさ

りどあさぎか桔梗ききょうか丁子ていじ茶ちやか、栗梅りゅうばい花色はないろ淡鼠たんねづみと、云ならぶればだまりお
 ろかしましい、ふしんも未まだみてぬ内うちくづれがうしとないまゝくしいあ
 いつあすからよせなどいへと、以ての外ほかの不ふきげんも、いわれぬすきや
 のかべぬろより晝ひるめしのえらかべこぼつたが百ひゃくくんのまじと、さくわ
 んいぶえゆびも内うちも入いる、大彌だいみ太元たいげんも昔むかし人ひとひたすら氣きもやかしりけん
 ためらうめら、此こゝ窓まは打うこぼつてままへ、早く〜と阿あの聲こゑおくへもれて
 や、娘むすめの白梅はくばいする〜と立出たちだ、何事なにごとをお氣きもちがひとと様さまもお腹はら立たさせ
 ます、是こゝと云いも自みづかがおそバばもゐなんだ第一だいいちの誤あやま、様子ようすの知しねどおきげん
 直ただされ、おこゝのほせん氣きをかへてわたしが部屋へやの庭にわのつゝじ、さいた
 もわれバばさかぬのも有あが一種しゆのほ着さか、さゝ事こと初はじてお遊あそびと物もの和やまらかよ
 わぶるよぞ、子こよほださるゝ親おや心こゝろ顔かほ色いろ直ただして、そりや氣きが替かつて宜よろか
 らふ惣もつとじて心こゝろよかゝるといひわひ直ただしが大事だいじの物ものいやそれよ付つて思おも

ひ出した、おまた入來る大工の中、人又すぐれて背の高い男め、つくも
見るよさいくの手バやさ、万事物なれたやつと見たそいつよべ、此窓の
祝儀祝ひ直させ、心よふ酒呑ふ其大工よんでこよ、はつとこたへる返事
の内お召なさるしせだかめり、私でござりますと出合頭の拍子よふ鉢
巻取てつくまへば、あれ見たか白梅、先づ退取てきてんきしこりや背高
近ふよれ、其方が育がら都の生れとめきししたが、此あふみへいなせよ
きた、是の有がたいお尋もど私ひだの國の出生、幼少のぶんより五
畿内を經めぐりて、きよねんより此おくよへ引こして參りしが、此度の
はふまんの頼朝様のお成とやらお出とやら、其は造作よやとわるしは
大工冥加よ叶ふた有がたいことと存て、みぢんのしを仕らす一ぶくの
むたべこを半ぶくよげんじて一むぢんよせい出しますれば、其はほう
びよ作料の五人前づしは拜領願上ると願ける、成程く其方が云通、悉

くも鎌倉殿、光臨有べきと仰下さる有がたさ、過ぎし比鶴が岡の八幡宮、造營の時、忝くも頼朝公、氏神への馳走とて、手づから石をばこび砂を持たんかづらを築給ふ、其ためしを思つてな、身も手づからの下地窓を差別も知ぬさく、いんめがむだ口、いかよしても心よかゝる祝ひ直してくれまいか、是れいんめがむだ口、いかよしても心よかゝる祝ひ龜の形万年のよわいよて、内の上しずは吹よせがうしふうきをよせると云心、お庭の花いと櫻むすびを永ふ頭をうなだれ下すが、なびき随ふまつ盛、おめでたふ存ますと祝儀とのぶればできた、こりや嬉しい、女子共此大工、勝手へともない料理くわせ酒呑せい、身もひるね酒過そふ、白梅こよと打つれてほた、悦びおくよ入、意の出た大事のお客殿様、さげんの、ひづみをあかす大工殿つゞくりぶえんの名人ど、女中のおどけよぎ、敷だい所へぞ通けるうしと見し、昔を今

したい草世を忍ぶ草まげる身のうきが中よもつまや子を心一つの實
の玉、あこやが名のみかひもなくからきせたいをしはたらと子持姿よ
古の端手をくろめるおかたぶり、ひる間の辨當夫の爲はこぶ心ぞ誠な
る、普請小屋さしのぞきさいくバをまだ仕廻すかど、おくを見入て伺ふ
中、おだい所のは馳走よ顔のひよりもよいきげん、いそくと出てくる
のコレちちの人ぞやないかいの、女房共か、ぼんかよふ來たなあと手を取
て是のくきついでつ、ぐんんぞでも、呑したか、此様なとなら晝めし持
てくるよ、及ぬ子の育様が、大よそな、いらいをきつとたしなめく、な
ふひよんなと云お人、どのやうな寶もかへまいと思ふて育上るゆ
うどが樂みそまつよするどいなければ共、廣いせかいをせまふくらし大事
をかしへたぬしのお身、大工のかげうのせひもなく、朝内を出しまして
も、どふかこふかとあんなぞられ晝の日あしを待かねて、辨當急ぐも顔見

たさきげんよふまいつてとふろ敷包取出せば、いや／＼けふの晝めし入ぬ、思ひがけもないとが殿様のは意又入、おだい所へお召なされ結構あおふるまい諸白を引受／＼近年のゑよう、ちとどが内のたんぼ酒うりバのちりと、ちがふた物といふ顔つれ／＼打守り、いとほや時世とて心も詞も、お下りむかし、い似ても似付ぬなりかたち、思ひ出せば、あぢきなや、人々多い其中、は一門の用ひもつよく酒ゑんらんぶの座敷もかたをならべ、膝を組さもうらやされたり、つ身の、ほんよきりんも老ぬれば、驚馬もおどると云たどへ、人又手をさげきげんを取わづかの酒をたふどがり、諸白のうりばのと昔は夢もいぬ詞、覺さしやつた悲々さと思ひず、かこつうき涙、こりや何をばかつくす、人いせんを芳しがらそと、男の外聞つくらしいの、僧上置てくれ、けれう誰も聞ねばこそ、むだ口やめて早ふいね道、おいどをつめられなど、おどけよ

まぎらぬめすかいのいねよく、女房の娘を抱て立かへる、おくより
主のこへどして、さいせんの大工それゐるか、せだか〜と呼かけて
庭へ出れば、是の殿様は用いか〜と畏る最前女子共へ云付た、殿へ
見こすくらの窓のゆふさぎ、いかよしてもうつどしい、成程其義の意
の趣かだい所で承へる、すさべわづかのはしたしごと明朝でも致しま
しよ、いや〜、年寄の氣がいらつげふ中よしまつてくれい、其義なら只
今ど形よ似合ぬ尻がるき、かして置たる道具箱えやんとかたげて脚
代の、十二のはしご大またげのぼる大工のさもなくて見上るさのあぶ
ながり心ぐれつく丸太の上、板の幾重のかけはしを遙、おくへど歩行、大
彌太はく〜、打うなずき、上の小袖ぬぎ捨れの下、腹巻ぐんばの出立
袂よりよぶこのふゑ取出しふき立れば、相圖よ随ふ日よう大工上り
かなぐり立出る、姿のゆる敷武士の、こしよとりなり十手たづさへ大彌

太が前よりならんたりつゝいて内より娘の白梅取なわしやんと玉だ
すき、長刀追取すうはりのこしももすも引しめて、心を配る二かひめ
りも數も又なまめかし、大彌太勇顔バせよて、いさぎよしかた、本
國玄なのよしみを忘れず、愚老がさしづよ姿をやつし、力となつて給
ゐる段、祝着せりと禮儀を述、扱此間心を付ためし見る彼大工、最前かれ
が妻女とて用有げよ來りしが、昔をしたふ詞のはし、疑もなき悪七兵衛
景清と立聞又知たる故、ふしんよと寄脚代へ上置たり、年頃日頃親子が
願、夫の仇聲の意趣はらさん時節到來せり、不便や聲のみおのやが未此
世よあがらへゐて、かくと傳へ聞あらば、嘸ほいなくも口おしからめ、と
い思へ共手よ入敵やみくと逃しなば、月夜よ釜のぬかり武士と世上
のそしりはづかしく、ばん手のかねて定置はやふんぞめと下知するよ
ぞ、心的一致の信濃育きそのかけはしそれならでのぼるはしの子村鳥

の羽音もかくや脚代のふみどもしどろよせかゝる、悪七兵衛景清の、
心も兼てもうけの敵土藏をこだてよつゝ立て、物ふしやとおかしや、
景清をからめんと、大黒柱を蟻の髻と、わざ笑ふすさまを見て、とつた
どかゝる一ばん手、はつしとけられころゝゝ、高卑するどき瓦やね
巴どしな又ならんで三方より、かけよればまつかせと、匠ぢやんの斧のもちよんど首くびとん
でこけらを風の吹敷ごとく遙か投て、鎗やりの飽かんとのがさじ者とひよつと出
の、あたまはつしとさい槌つちも、めを白くろとみつめざり、此世の息いきをはな
しのみ、手並あひ又かなづち、鏢のこすりの目め又立相手もあらばこそ、一どよどつとむ
らがるを、當あたり任せよひつ、抓つかばらりゝと投なほふるに、大工のいさどて
棟上むねあがりのもちまきちらす、「とどく也、大彌太今いたまりかね、娘我ぢや又續つづ悪
七兵衛景清が鬼神おにがみよてもあらばこそ、チヤとく様そふでござんす、人と人
とのせうぶづく命を捨すてやすかりなん、親子うなづきはしの子よか

け上らんとする所所まばしく根井殿に待われど聲を懸かどり出るの
いせんのさくいん大彌太いらつてさくいんたいある妨ままたげやつおのらが
出る場所ばしょは非あちずしされやつといかるよぞ、まのらねバ實げに尤かくそれ某
こそ、鴛むすこ鳥の契ちぎりをなま置みおのや四郎國時くはにときと詞も引ぬまはつたどね
め付めづ、しらく敷あざれ紛まざれ者もの儻たう誠まことのみをのやならバとくもななのつて出、惡七
兵衛景清をからめんと思ふ氣きのちくて、三里下ちりつてみおのやといひ、聞
へたく、扱あり景清が一族いそぐな、我われと心こころをゆるさせ此場こゝを遁のがさん計畧けいりやく娘
かまふな捨置すてと又またかけ出すを抱留いだきは尤なほのは詞ことば付つ狙ねら景清と名なを聞きなが
らためらひしし、知しし召めすや日本にっぽんは惡七兵衛二人有、内一人うちひとり似にせ者ものは
てゐバの十藏じゅうざうと云おのこ、様子ようすをかたればと長ながし其そのままつぶをたゞさん
爲な、最前さいぜんよりさし扣ひかへの様子ようすを伺うかふよ、かうきの働手はたらいて並ならの程ほど、正真しょうじんの惡七
兵衛べいゑは極ごくつたり、然しかる上うへのみおのやがぶらんを開ひらくてとぞと思おもひ、罷出

たる某が誠の出立はらんあれど、かなぐり捨るたちつけの去やうぶか
のよ引かへて、せうぶよゑき有はだぎの小具足こぐそく、家職かしょくもあらぬこて脚
當かまど兜かぶとづきんをおほひたる下は誠のほし甲鎧かぶとのきかれてと諷ふたのれし、名の
源平は隠なきみおのやとこそ知れけれ、白梅嬉しき飛立計、扱あひお前が
みおのや様さま縦たては身みの耻辱ちゆうとくの有共連あひまそふ女房にようぼうも何遠慮なんりよとくもありかも
お知せ有、まめでぬる氣遣きぢひすなどつい一筆の便して、落付おちせふと云氣
もなくあんまりなきづよさ聞へませぬとかきくどく、尤なほの恨うらみながら、惡
七兵衛景清しちべゑかげせいも廻めぐりあひざる其内そのうちの、面目めんもくもあきみおのやと忍しのびくらせ
しかひ有て、今日けふ只今景清しげせいも廻めぐりあひしが結むすぶの神運かみうんつきて討うたるゝ共
みらいの契ちぎりたがへじと、云に悦よろこぶ父の大彌おやのや太頼たのもしく、其詞そのことばが取とり直ただ
さぎこん禮らいの盃さか、我手われても入いれた景清かげせいを左邊ひだりも任まかすが聲引手こゑひて、舅うぢが寸志受取すんしじうと
給たまへ、忝はにかまは賜たま、祝納いのちうりるゑんのつあと、どりなれたぐり大音上おほいんじやう、かづさの

七兵衛景清のいづくも有去元曆の戦ひもげんざんまたる源氏の武士
みかのやの四郎國時汝も廻りあひん爲かりもやつしのさくわんがこ
てさきゆうきのあらかべ打こぼち三寸なわよくくり上んかくごく
と呼つたり景清こらへず進出珍じやみおのや昔の弓矢引かへて汝
も我も職人わざくらの鉢巻引しめて首の骨こそつよく共此七兵衛が
腕先も受取ぶしんのかわざ手並の手間ちん覺わらん猶も耻辱の上ぬ
りせよと互も付よる身のかまへ眼を配り氣を配りふむ脚代のだんの
うら八島の戦今こしと見るやと計いとみ合えべしせうぶも付ざりし
が互もひつくむ脚代の板ふみくだき廣庭へとうと落たるはづみの拍
子景清上も重なりしをえいやとかへすみおのやが一念力の一筋もか
らむるなわのゆうしのいち時の運命せひぞなき誰かいかくと告たり
けんつまのあこやかひと敷幼子せなまえつかと負上おびしめて腰

刀息かたきいをばかりよかけ付しが、夫のなれめよ目もくれて、胸むねの涙なみだのやみな
がら、そも何者のしわざぞとあたりを見廻し見こなたのみかのや殿、京
からくだり先へ付て廻つて聞へぬ人、又ぬつペリの口上くちじやう手よこちらの
夫をたばかりしかサア千も万も入ぬ、あのなわどいて主返ぬししや、いやかお
ふか返事次第おなごがさいても刀の刀、かくこの魂違たましひちがひないど反そむを打
てつめかくる、みちのやさわがすさすがの女血迷ちまよふたな、都よて逢あひし時
景清又廻りあひ、必本望かならずとぐるぞよどつがひし詞忘わすれしな、何とも定る
運うんと思ひ明あきらめはや歸れ、いやくいやく明あきらめまい、恩かんも情なさけも義理
も法も、夫よの換られぬとすらりとぬいて打かくる、どつこいさせぬと
白梅が中よへだつる長刀ながたちの鑄しんぎをけづる女どち、悪七兵衛立上り、たしか
ふあこやよ押隔おしへだり、後手うしろでながら引すゆれば、なふ情なや景清殿、此期このときよ及
んで妻子の命かべふてのまわざか、責せめて女の念ねんばらし針はりでついた程成

共、みおのや、手を負せ、死たいわいのとはがみをなし身をもだへたる
叫泣、さすがの景清もてあつかい、まばし、あぐみておたりしが、エッせひも
なや面目なや、某息の通ふ中詞、い出さじと、思ひ極しと、あがらは成女
が旁を、敵よ仇よと付ねらひ、道よ背ん不便さよ子細を語聞てたべ、何な
ふみおのや、はへん、弟、こりや我の兄、一腹一生の兄弟成いと云よ人よ
顔見合是いと、驚く計也、みおのや、更よ信用せず、我父母よ離し、い入さい
はや東西も辨たれば、對面、いあらず共兄有と云と、噂よも聞べき筈、いか
様子細もあらんが、先父母の住所名字けいづのいかよく、父の名の
愛甲の太郎國久とて、源氏武士の浪人、母の氏、平家の侍上總の一統、住
所の相州、みおが谷、其時我の十一さい、い邊、二さい、母のゆかりのかづ
さの家より、某を養子よせんとひたすら、のこんぼう、父國久の仰、い、よ
しみ有かづさの家、筋なきと云よもあらず、養子と成て平家よ、いよ、去

あがら、今より後の親子兄弟音信不通、それをいかよと云ふ、二さいの弟
が人となり父が名字を受つが、兄弟源平と引わかり、一せんよ及ん時
平家の方より兄有と知らば、はんわいよせまり義理よ迷ひ、思ひぬふか
くを取もやせんと、行末思ふ親の玄ひ弟が爲と思ひ、一生不通よして
れるが、却て親への孝行と、理よ當りたる父の詞我のそれより平家と成
は身の未二さいよ何辨もあらぬ、上父母深く隠せしなれば兄弟有共
知れぬ筈、我もは身の面肺の覺ず、愛甲の家、改めしとい元より知
ぬ、箕尾谷四郎を弟と知たるせうこのこりやしい女房、我懐の一包人よ
よみせてくれよと取出させ、だんのうらの戦よ引ちぎつたる兜の鍔、我
高名の印ぞと取て歸り能見れば、うら書よ記せし、弓矢神のは託宣、八
幡座より鍔迄書下したる父が筆、則愛甲の名字の因縁、あいする甲の家
の重寶是を着せし、みかのや、我弟よて有ける物をあくらよしなき手

がら達と悔なげまかへらぬ浦波のあゝと消行平家の果我一人残りしい運えん
つよき景清頼朝を討うべしとふてきよも思ひ立、こんきを碎くだまかひもな
く無念むねんの月日をくらす内、みかのや四郎國時が我を狙ねらて尋ると是成あ
こやが物語、つくづく思ひ廻めぐらせば實まことの父がかたみと云廣い天地の其
中な、たつた獨ひとの弟憐あはれをかくるい兄の道、所詮頼朝を討たるとて、昔の平
家と取立る公達きんたちとてもあらばこそ此上こゝの我身を捨弟しやていと高名させ、弓矢
の家を起させんと、思ふい幸さいを引たる此こゝやしき、邊へんと尋あふ物か
二つより又運かきよ叶かひ、頼朝より出でつくりさば、本望ほんぼうとげんと入込いりこし、鎧よろいじあ
んのぬけめなく廻りあふたる我弟、命をおしまぬ働はたらをかんせし故ゆゑと景
清が、ほうびのなわめめ及およびしぞや、只今かへす其その鎧兜よろいかぶとは繼ついでで家も繼つぎ手
がらいかいやくほし兜と武士の名をてらしてたべ、此上こゝ又兄なりとて
なはをどかば直すくまかん當、他人と成景清取逃にがしてい耻辱ちよぶは耻辱重かみちるが

合點かどから釘かへす詞詰心よこたへて頼もしき、みおのやはつと飛
しさり頭を地又付涙を赤がし親のは慈悲兄上のは情何と報ぜん詞も
なし、知ぬ上どの云ながら勿躰なくも組伏て、昔の武士又歸らんと笑を
含し淺ましき、六度契て兄と成惠も有る弟の七度の結なしもせで、結か
らむるまばりなり、天の照覽空恐ろしよしはか當あらばあれ、いでい
ましめをと立よればふり投つて愚る、弟と知ず兄と知ず、知ぬ昔は歸ら
ぬ道、互の因果のあざなへるなわめと思へば悔もなし、女房ももふほゑ
な、兼てかくと語なば、心落さん不便さよ是迄のかくしゐたり、鎌倉へ引
れなば大方永い別ならん、何云殘すともないが娘を無事よと計みて、よ
そめ遣ひよまぎらす涙あてやのどかうの返答も、泣沈たるうき思ひ、さ
つしやりて白梅がわたしがあのをときますれば、どつこへもさのりは
なしと又景清又取付ば、小ざかしき弟嫁、此なれといて侍捨させ、誠の

さくいんど成、下らせ士よ夫の顔汚せか、一時も早く鎌倉へ伴やつと立上れば、情ない兄人、某が身よも成思ひやつてどかきくどく、聞分もあきおのこ、イヤ身こそ聞分なしと、争果しも歎え沈い二人の女房、根井太夫横手を打、仁成哉、義成哉、先刻よりかふるいよ目を泣はらしひよ、みおのやが心底のせつなき推量いえつれ共、景清の心ざし深きぞたいの却て不孝、責ての恩を報せんいあこや殿を身よ引受、幼娘を養子とせよ此大彌太が初の孫、時しも三月十八日、けふの祭の神聖人丸娘と名を呼て育る老の樂みと歎の中の悦び顔、景清あつと頭をさげ、頼もしきは詞望いたりて一門一家、廻り合たる月も日も其元暦の八島の戦、取も直さず三月の十八日、信ずる佛のほえん日、臥刑欲壽終念被くいん音の、力をえんと疑なし急げや急げと先よ立いさひいな付あひ取ひ、心えほれて立かぬる、あこやの夫よ耻らいて涙、吞込くもり夢幼き娘を、抱上是な

ふ今のどし様が、鎌倉へござらしやるめでたふ頓てお歸ど、さそふく
してたもふ、其次手よもとのどし様顔の見おさめ見せおさめ、永いさら
ばのさそふをしやど、我身の心かこつけの、詞も涙よむせび入身を打ふ
して歎くよぞ、かゝるあわれよ大彌太も涙たゝゆるまばくめ、浮世の
中よ武士程義理の悲しき物になし、云たさ泣たさこらゆるつらさ、なせ
よ二人の腹からのさくんや大工よ生れあんだ、職人の身ならばなあ
こふしたと有まい物と、さすがの老のくりとよ、白梅あこやも顔見合
つしみかねたる歎の色わつと涙の、いと櫻庭の、立木よまがふらん、景清
わざといかりをなし、みれん也愚也源氏そだちの侍の會者定離をも
わきまへず、さい子を忘れ親を忘るゝ弓矢の義心も知ざるか、耻を耻と
も思はずやと聲あらしかよいひはなせば、大彌太歎きおしとめげよ
誤つたりそれよく、音又聞へし景清を、からめ取たる箕尾谷が興れり

くちせぬ石だゝみ、根井の太夫が家名をつげんとかど出とぶくどのは
よ、深き涙を忍びの緒兜もむかしよ立かへる、鏝のほしの花の兄、かつ色
見するは恵といさみ立たる匂い鳥、つらなる枝よ若木の花嫁老木の松
よみどり子の、いたいけ盛見、殘しておしむや、春のほし月夜鎌倉、さして
ぞ急ぎける

○第五

百戦百勝勇士の名を定がたし、死を安くして名をあらわすといへり、か
づさの景清みづから頼朝の手よ渡れば、扇子が谷よつめ籠をまつらひ
取ておし入、けいごに在鎌倉の諸大名、一日一夜づゝ番がひりよ預りて
きびしく非帝をいましめらる、根井の太夫希義當番よて未明よ相誥、見
れば門々當所の幕海扇の紋所、昨朝より今朝までの岩永左衛門當番よ
き、根井の太夫番代よ參つたりと、云入れ共役所を渡すていもなく、走つ

て出る人息を切て戻る人、足をどかせ櫛の齒を引こどくなれば何ごと
やらんと根井の太夫不審あがらも立やすらひ返答おそしと待おたる
まばらく有ては通り有べしとあんないさせ、岩永左衛門しほくと立
出、根井殿早速の番がわりは太儀千万、お目よかよつて詞もあひ、先
以箕尾谷殿景清を生どり高名ひるいなく、貴殿も昔よ立かへりは親子
ならんでの勤目出たいとすそふかは大悦推量致いた、扱其景清よ付
てらと、は了簡よ預らねばならぬわけ有、お聞なされ、籠をぬけついと致
した、とい入口の錠おろさずか、但は水道前などよりぬけ出し、か、いづれ
の道よも不念ありと肝つぶせば頭をかき、それなれば下々の不念とす
分も有が聞てたべ、櫛白櫛梅の木長さ一丈有物を大地へ七尺はり入
上三尺のつめ籠櫛でくもでかうしを切くみ、一尺二寸の大釘うらをか
へさずひつしと打、足を籠より外へ引出し入ちがへ七十五人して引た

る楠くすのきよてわけほだしをうたせ、ぞつちやうつめがねたうく、樞くろ大おほばん
 ぞやくをつみかさね、是こゝの根ねほりの大竹つくと切てかづかせ身み働とも
 ならぬ、是こゝはらんなされ此籠こゝろを、やぶりましたと幕引まくひのくれバ立寄見て
 びつくりし、是こゝ程ちやうぶと拵こしらへたを、やぶる音が邊へんのみくへ入ざるか、
 面目めんもくもないそばよゐてみぢんもみくへはいらず、くつくりと寝たまの
 夢程も存せあんだ、只今より明朝迄あしたまでの貴殿きでんのほばん、此通り言上ごんじやうなさる
 れバ此岩永このいわなが、よい仕合で遠嶋とんたじまの見へて有り、は了簡りやうかんとす、餘あまの義ぎでない、
 方はうくへ追手おいつてをかけたれば、召よとつて歸る、早ふて五つおそふて四つ迄
 きたなしよなされ下さるれば、大名一人は取立とりだて、目めよ見へぬと堂塔どうたつ
 こんりうさへなさるくじやござらぬか、根井殿ねいどの、ナヤとあまへかゝれば
 何なにさく、みおのやといふ臆病者おくびやうの子を持、どばしりのかゝつた此太夫
 又頼たのどいはないはづ、こゝよが笑わらひ、是こゝはぞゆつない、それをこゝで仰おほられ

てい消たいく、白梅殿はこん禮何やかやのお悦びよめんじ、せひお願
と手をする所へ、荒木源五息を切てかけ付悪七兵衛景清を三个村とす
す所みて生どり、只今是へ引て参ると訴ふれば、岩永いきくいきり出
し、根井頼と何もない、追付景清渡しやと、手のうらかへす舌も引ぬ
前後をかこみけいごきびしくつれ奉る、根井の太夫きつと見、是が逃
た景清か、みおのやが生どつて差上し景清よ似り似たれ共そふでな
い、さつするよ是の彼井場の重藏、景清よして此根井受取と罷ならず、刻
限うつる此通り言上せんと立出る、おやち様せわしない、まあ半時待
てたべ追付誠のがきますわいの、やい者共、追よ又いけく、と追かけ
させ、扱の傍講釋師めか下河原でも取ちがへ、一度ならず二度ならぬ妨
やつ、何として腹ぬんと立蹴よどうとふみたほし足よ任せてさいなむ
所へ、誰訴しか頼朝公重忠よ口どらせ、ひづめをとバせかけ付給へバ岩

永大きよはいもうし、頭かしらよ天の落かするかと土つちよひれふし恐れ入い只今いま
言上仕らんと存る所ところに駕がをくるしめ奉る、夜前景清籠さかを破やぶりぬけ出候、
言語道斷ごんごだうだんのよつくいやつと、いわせも立す馬上ながらは聲高く籠さかよ入
たる計はかりよて逃にげうせぬ物ならべけいごを付るよ及ぶべきか、長く一人よ
ぼんさせてい怠おこたゆるだんも有べきかど、一日一夜を限つてかわるくけ
いごせよと云付いひしりなんの爲、籠かごを破やぶつたる景清よとがいなし、番を怠
り籠かごを破やぶられ、取逃とどしたる儕せいのれこそよつくいやつ、諸士しよしの見せしめ急度きつどけ
いばついばつよ行ゆへ重忠じゆうしゆと、立腹大かたならず見へたる所へ、みかのや四郎
汗あせをひたしかけ來り、籠かごを破やぶり落おうせたる景清、是へ參上仕ると予詞の
下よりも、妻のあこやよ手を引れ片手ひたての杖つえをつくと見れば兩眼りやうがんく
り出し東西、わからぬ其ふぜい、十藏じゆざう驚走寄、御身がとを聞たる故何とぞ
ううバひかへさんと來る所、景清籠かごを破やぶり落おうせたりと尋廻る、嬉うれしやト

い所へ出くわせし、兼て命よかいらんと念願のこゝぞと悦び、景清是よ
有と名乗て安くと生どられし、其間よ落延させん爲是迄來る十藏が、
心ざし、無よなつたか直ぐよいづくへも落てくれぬ、そバからもなせ
氣を付ぬ妹、十藏が思ふ程よない、曲がない景清とぞだんだふんで、泣
ければ、なふ其氣も付たれど、憐が知たとぞやないとぞかられて、泣て計
どすがり付重て袖をまぼりける、重忠はらんじ珍らしや景清籠を破り
遁れ出たる身のいかなれば立歸り、殊よ兩がんをくつて盲目と成たる
のいぶかしし、頼朝公も聞し召、心底を明されよ承いらんどの給へば、
の給ふのちよふ殿はな、お尋なく共よ上んと存る所存餘の義よあらず、
かくは敵と成て付ねらふ我なれ共、どかく命を助けはみかたよ、召れん
爲のは情中よ及はず、海にわせて山と成共二君よ仕る我ならねば、まよ
せん此籠ふみくだき、せき破りのどがを拵がいせられんよ心づきしが、

思へば其日のけいこの侍籠を破られ取逃し、我故とかめよ預らんも罪作りと、一日く延せし所、昨朝より岩永がばんよかいつてつらを見るよりあら嬉しやいこん有左衛門どがめよ合ふが殺されふが、いよがけのだちんどやらんこよひぞ籠の破り時ど、なんのくもなくぬけ出し、外よどがをこしらへて誅せられんどの我念力もよ助ての政道立まじ、急いで我を誅せられよ、又兩眼をくりたると、今鎌倉のはん宏やう、頼朝のおせいを見るよ付二たびあだをなすまじと、思ひ捨てもぼんぶ心見ず、いうらみもおこるまじと頼朝を二たび見ぬ、分別、みらい遙くあだをあすまじ、恨を殘さぬ心のちかひ、急ぐり捨たる兩がんに、頼朝殿へ景清が、今生みらいの寸志ぞや、首打てあんどあれと首さしのぶれば、頼朝公、おつばれ武士よものくよ、平家の恩を忘れぬ如く、又頼朝が恩をも忘れず、月日よかたどる兩がんに、我故くつたるけなげやと、勿昧なく

もは大將は落涙ぞ、有がたき、左衛門一人むくりをおこし、左程あいた
首ならべ左衛門がさらへ落し、籠を破られ取逃したや分よすると呼
れ、餘りのとよは大將、どかくの証もましませずあこやこらへず、あ
のいふたつらわいの、目の見ぬ人の首取て、云分よ成か、手がらよ成か
あほうくさいと耻かすれ、女房だまれ、岩永が手よあふ者のめくら
か、ぬざりか、子供ならで外よいなし、尤よならべ、首取て見よ、ふくろの
土を丸めて我子とし、くらげのゑびを以て眼とすると楞嚴經よ有と聞
我其如くあこやを以て眼とせん、後々我をかいはうしやいべの向ふ其
万へ、引廻して教よと杖打ふつて立上れば、源五手つたへ盲目とてぬか
るなど左右よ別切かゝる、根井親子の景清よゑん有顔を憚て、よそよの
知ぬ氣をもみ上げ心を冷してひかゆれば、十藏の又景清が詞のいじを
立させんと、とめず指出す縛れながら眼をくばり、すわといひ、飛か

らんと打太刀先又氣を付てそりや、右よそれ左よ、はらへあぐれと
辭を懸、我手をもつてたしかりぬ心のやひばのまのぎをけづり、頭又上
るいけふりの火花を散すごとくよてまたしきもせぬ程もなく岩永主
従太刀打落され、二人一度よしのみ付取てふせんと身をもがく、景清ち
つ共たぢろかず、二人が首筋兩手よつかみ、ぐつとしむれば眼を見つめ、
よわる所を取てふせ膝よひつ敷一息ついたる心の内嬉しさとへん
かたもあし、其隙よあこや立寄て十藏がいましめ切はどけば、なふく
景清、一人又二人の手がら過る、岩永は、我よくれと取て引立、どがの儂が
心よどへと首、ゑいやつと捻きれば景清悦び、儂も主の供せよと源五が
首も一時よ、ちよいと引ぬき捨たる、手習子供てまじひの書捨し筆の首ぬくと
どく也、十藏かたへの太刀追取て大音上、助けんと云君よ、君の情有、討
れんと云景清の二君よつかへぬ忠義有、中を取て此七兵衛景清が腹切

上の情も忠も是迄也と太刀をさか手又取直す、重忠はらんじ、は十藏、景清がと、此曉、洛陽、清水寺のくわんぜ音君の、枕又立せ給ひ、命を助けゑさせよと、みだい所もまのあたりれいむを蒙り給ふ、それ故是迄は馬を出されたる、と、いよもしらじ、かりよも景清となつて生害せば、大玄のかごと、背くとわり、名代の切腹尤ながら無益也と、といめ給へば、然らば、家人岩永を手よかけ討たる、其誤、井場の十藏又立かへつて切腹せんと、はだ押ぬいで身づくらふ頼朝扇を上給ひ、やをれ十藏、左衛門を討たる、其どがを糺明せば、あんふん又腹切すべきか、我此曉、景清を助よとく、いんせ音の靈夢を蒙る、さればこそ左衛門が、盲目の景清、又乃ひしをせいせんとい思ひしが、大じ大ひの、かうと有景清やわか過り有まじと思ふ、またが、いず却て主従手よかくりし、い、景清十藏が殺す、あわらず、二人又千手の手をかして、悪人を殺させ給ふ、是こそ還着於本人經文あら

たよおやまりなき、大悲のちかいと覺たり、然るを汝切腹せば、弁の觀善
懲惡の心またがふ、大惡逆恐るべし、今より我も奉公し譽れを末世、
又殘すべし、又景清のふちすべき平家もなく、頼朝が祿も受まじけれバ
飢又つかれん不便也、兩眼のくらく共心ざし、日又向ふ日向、勾當の官
を蒙り、なじみの平家を琵琶かたつて、片時も昔を忘るべからず、万事
の根井親子の者宜くはからひ得さすべし、个様も上下和すると念彼く
んの音の力我大けい、是又過すいざ歸らんと立給へバ、夫婦兄弟みお
のや父子首を天地又ひれふし、詞もなく有がた、涙ふし拜み、
君を傳き立歸る佛道、武道の助として、治りなびく源氏の政道、万歳
の末かけて盡せず、つきぬ八千代の松かいらぬ色、吳竹のふしを重ねて葉
もしげる五穀成就、民安全おさまる、國こそ目出たけれ

壇浦兜軍記

畢

明治二十四年七月卅一日印刷
明治二十四年八月一日出版

翻刻者兼
發行者

日本橋區通四丁目四番地

內藤加我

印刷者

日本橋區新和泉町壹番地

瀧川三代太郎

發兌

日本橋區通四丁目四番地

金櫻堂